劇団文化座公演145　上演台本

三婆

原作　有吉佐和子
脚色　小幡欣治
演出　西川信廣

第一幕

第一場　神楽坂・駒代の家

昭和三十八年頃の初夏。

舞台は、神楽坂にある駒代の家の応接間（あるいはダイニング・ルーム）で、下手にベランダと庭の一部を見せる。正面は奥座敷へ通じる出入口。下手のドアは、廊下を通して玄関の方へ続く。室内には、応接セットの他、数点の調度類を置く。快晴の、そろそろ昼に近い頃で、応接間では武市産業の社員の馬場がメモ用紙を田所に渡して話をしている。

かたわらで、供花を担ぎこんだ葬儀屋の重藤が立っている。

馬場　名前はここに書き出してあるから、表の公衆電話で掛けるンだ。分ったな。

田所　電話ならここにありますよ。

馬場　ここじゃまずいから言ってるンだよ。いいか、都合で今夜のお通夜は、目黒のお宅で行なうことになりましたので、どうぞよろしく、と、こう言うンだ。

田所　ああご本宅ですか。

馬　場　そう、ご本宅――余計なことを言わなくてもいいンだ。なお、告別式の日取りにつきましては、あらためて、こちらからご連絡させて頂きますと、分ったね、分ったら急いで。（去ろうとする）

田　所　はい。（と去る）

重　藤　（馬場に）ああ、ちょっと、あんた。

電話のベル

馬　場　おきよさん、電話ですよッ。

女中のきよ子が出てくる。

きよ子　はいはい、武市でございます。

馬　場　（重藤に）あとにしてくれないかなァ、僕はいそがしいンだよ。

重　藤　いそがしいったって、それじゃお花はどうするンです。持って帰るンですか？

馬　場　だからさ、こちらの都合で、急に予定が変更になっちゃったんだよ。

重藤　しかし私は、こちらの奥様から祭壇は松の特Ａにしてほしいと頼まれたんです。じゃ、よござんす。今伺うと、目黒の方でお通夜をなさるそうですから、私がそちらへ参りましょう。

馬場　そりゃ駄目だよ。

重藤　どうしてです。仏様はこちらでお亡くなりになったンでしょう。

馬場　そりゃそうだけど、これにはいろいろとこみ入った事情があるンだよ。

きよ子　（咳ばらいをする）……どうもご丁寧におそれいります。はい、左様申し伝えます。有難うございました。（と戻して）馬場さん、電話をお使いになったら、奥に切換えといて下さいね。（と去る）

馬場　（重藤に小声で説明していたが）まァそういうわけだから、ひとまずこの花は持って帰って下さい。あとで専務にそう言って、きっと悪いようにはしないから。

重藤　（舌うちして）えらいことになっちゃったなァ。

下手から店員の森が供花を抱えてくる。

森　旦那、これは奥へ運ぶンですか。

重藤　店へ持って帰るンだよ。
森　え？
重藤　いらなくなっちゃったンだよ。
森　――仏様が生き返ったんですか？
重藤　莫迦。死んだ人間が生き返るわけがないじゃないか。さあ、行くンだ。大損害だ！
馬場　すいませんでしたねえ、本当に。

重藤と森は供花を抱えて去る。
奥からチーンと鐘の音が聞える。
やがて駒代（58）が、専務の瀬戸重助（63）と一緒に現われる。

駒代　なにもあんた、目黒がそう言ってきたからって、ここへ来て葬儀屋まで代えることはないじゃないか。はばかりながら、費用の方は私が出すと言ってるンですよ。
重助　ええ、そりゃよく分っておりますが……（去ろうとする馬場に）おいおい、先刻セロテープを買いに行ったな。お釣は？
馬場　一万円でお釣だなんて言うもんだからいやみ言われましたよ。お調べ下さい。（重助

数えおわる）よろしゅうございますね。

重助　領収書。

馬場　一個五十円のセロテープですよ。領収書がいるンですか。

重助　いるんですかとはなんだ。たとえ社員が五人しかいない会社でも、うちは金融業だ。一銭一厘といえども会社のお金だ。すべきことはきちんとして、最後のご奉公――まァいい、あとで貰ってきなさい。

馬場　はァ。（と去る）

駒代　重助さんも大変ねえ、これからはあんた一人が頼りですよ。

重助　いえ、私なんかとても……それより先刻のお話ですが、やはりこの、世間の常識ということもありますので……。

駒代　それが私は面白くないっていうンだよ、だってそうじゃないか。旦那はこの家でお亡くなりになったんですよ。私とあんたの二人に看取られて、最後の息をお引きとりになられたんですよ。よくよくの深い御縁じゃないか、（と涙をふき）だのに、なんだい。今になって急に、目黒のかぼちゃ婆が本妻面しやがって……私は口惜しいよ。

重助　お気持は分りますが、先刻の電話では、もう既に目黒をお出になったと言っておりますので……。

駒代　来たって渡さなきゃいいンだろ。ああ、だれがなんて言ったって、私は絶対旦那を渡しませんよッ。

重助　そんな無茶な。

駒代　なにが無茶さ。旦那はお若いときから、目黒のかぼちゃが大嫌いで、月のうち半分以上はこの家でお暮しになっていたんですよ、そんなことはあなたが一番よく知ってる筈じゃないの。

重助　しかしですな、いくらお嫌いでも目黒のかぼちゃは――いえ、あちらさまは、もうまもなくおみえになるンです。それに、目黒ばかりではなく、渋谷の方も、こちらでお通夜をなさるのは絶対に反対だと言っておりますからね。

駒代　なにが渋谷だよ、旦那の妹が偉そうに言う権利はない筈だよ。

重助　そうは参りません、社長にとりましては、この世で、血を分けたただおひとりのお妹様ですからね。

駒代　へん、お妹様って顔ですか、あの電気クラゲが。

重助　かぼちゃだとか電気クラゲだとか、そう興奮なすっちゃいけませんよ。

きよ子がトーストと紅茶を持って入ってくる。

きよ子　奥様、お昼はどうなさいますか？

駒　代　それどころじゃないよ、この騒ぎに御飯なんか喰べられるような――(見て)なんだい、それは？

きよ子　トーストにお紅茶です。

駒　代　だれが喰べるんだい。

きよ子　渋谷の奥様です。

駒　代　お昼にはおいなりさんが用意してあるじゃないか。

きよ子　渋谷の奥様は油揚げがお嫌いなんですって。

去る

駒　代　重助さん、聞いたかい。私ですら御飯がのどを通らないっていうのに、血を分けたたった一人のお妹様はトーストにお紅茶だとさ。それもいいよ。私の家へ来て油揚げは嫌いだなんて当てつけがましい皮肉を言うことはないじゃないか。

重　助　どうして当てつけがましいンです。

駒代　あの人は、蔭で私のことを、きつねきつねって言ってるんだよ。

重助　それは奥さんの思いすごしですよ。おタキ様はお若いときから、心臓リュウマチで苦しんでいらっしゃいますから、食事なんかも気をつけているンです。まァ、お腹もたちましょうが、ここはひとつ目黒のおっしゃる通りにしてやって下さい。いえ、奥さんのこれまでのご苦労は私が一番よく存じております。

駒代　(涙ぐんで)……くされ縁というのかなんていうのか、お世話になってから、アッというまに三十年だ。そういえば、重助さんとも古いねえ。

重助　たしか奥さんが赤坂にお出になっていた頃、私は旦那のお供で、何度かお座敷に伺ったことがあります。もう三十年になりますかなァ。

駒代　私も今までは日蔭者扱いをされて、随分つらい思いもしてきたけど、こうなったからには、本宅も別宅もないと思うンだよ。三十年間、精一杯つくしてきたんだから、今度はこちらが、それだけのことをして貰わなきゃァ。いえ、私のことを言ってるンじゃないのよ、あんたのことを言ってるのよ、いえ、そりゃ少しは私のこともあるけどさ。つまりその……いずれは旦那の形見分けなんて話があると思うけど、そのときは重助さんに頑張ってもらいたいのよ。

重助　頑張るとおっしゃいますと？

駒代　分っているじゃないの。私は、三十年もつくしてきたのに、今だに借家住いですよ。家賃を払って、この家に住んでいるんですよ。だのに、渋谷の電気クラゲは、ぶらぶら遊んでいるくせに、自分の家に住んでいるンですよ。

重助　しかし、あの家は社長の名義になっております。

駒代　名義はそうでも、自分の家には変りはないでしょう。私はそれが不公平だと言ってるのよ。

重助　いや、実は、渋谷のお宅なんですが――――（と言いかけて黙る）

馬場が慌しく入ってくる。

馬場　専務、只今御本宅の奥様が――――。

重助　おみえになったのか？

馬場　はい。

重助　君は奥へ行って、渋谷の奥様にそう申しあげてきなさい。あ、それから、太陽産業のほうはどうなった？　分ったか？

馬場　今、連絡をしておりますから……。（と去る）

重助　こちらへお通ししてもよろしいでしょうな。

駒代　仕方ないでしょう、来ちゃったんだから。

重助は急いで廊下へ去る。　駒代は急いで着物の襟元などを直す。
ドアがあいて重助が戻ってくる。

重助　こちらでございます。

正妻の松子(62)が現われる。

松子　お邪魔をしますよ。

駒代　まァ、奥様(とハンカチを目にあてて)このたびはとんだことで……奥様にはお詫びの言葉もございません。私というものがおそばについておりながら、こういうことになってしまって……本当に申しわけございません。

松子　あなたにはいろいろとご迷惑をおかけしたそうですね、主人に代ってお礼を申しますよ。

駒代　なにをおっしゃいます、奥様、ささ、旦那様はこちらでございますから……。

松子　重助さん、お通夜は私のお願いした通りにして下さったんでしょうね。

重助　それはもうばんたん心得まして。

駒代　それなんでございますよ、奥様。重助さんがなにを勘違いしたものか、近所の葬儀屋さんを、私にことわりなしに連れてきてしまったんです。

重助　えッ？

駒代　そこで私、申しましたの。御本家様を差し置いて、私どもでお通夜をしたのでは、第一に筋が通らない。いえ、それよりもなによりも、世間の常識というものがゆるさない。こう申しましてね、今も重助さんに懇々と言い聞かせておりましたところなんでございます、ねえ、重助さん。

重助　え？　ええ、まァ……。

きよ子が入ってくる。

きよ子　専務さん、馬場さんが奥で呼んでますけど……。

重助　渋谷の奥様はどうなさったの？

きよ子　(見て)ああ、今、こちらへ。

奥よりタキ(60)が現れる。

重助は会釈して、きよ子と共に去る。

松子　おタキさん。

タキ　お姉さん、まにあわなかったのよ、私も。こちらからお電話を頂いて、急いで駆けつけたんだけど……もう駄目だったの。重助さんの話だと、お風呂へ入る前に冷たいビールを少し飲んだのがいけなかったんですって。

松子　お風呂？　お風呂へ入ったの。朝から？

タキ　あら、お姉さんは聞いてないの。

松子　知りませんよ。重助さんは、私には御不浄で倒れたと電話してきたんですから。

タキ　それが違うのよ。私はこちらの女中さんに聞いたんだけど、倒れたのはお風呂なんですって。それもお姉さん、生まれたまんまの恰好なんですって。

松子　まァ……本当にお風呂なんかに入ったんですか？

駒代　いえ、あの、ですから、私もずいぶんおとめしたんですけど、ゆうべは重助さんも一

緒に泊りこんで、夜おそくまで帳簿整理をしてて、つかれていたんです。

松子　いくらつかれてるからって、あの人は昔から血圧が高かったんです。私もそれが心配だから、家では絶対に朝風呂なんかには入れなかったわ。

タキ　そうですよ、それが常識というものですよ。

駒代　でも、一度言いだしたら、なかなか聞かない旦那様でしたから……。

松子　そうそう、それはそうですよね。でも、近頃は自分でも身体に気をつけて、私が渡してやる血圧の薬を、いつもちゃんとポケットに入れてたくらいなんですよ。まさか、自分から朝風呂へ入りたいなんて言い出すとは思えないし……ねえ、おタキさん、やっぱり魔がさしたとでもいうのかしらねえ。

タキ　兄さんは、さぞ心残りだったと思うのよ。せめて最後のときだけでも、身内の者がそばに付いててあげたかったわ。それを思うと、私……兄が可哀そうでねえ。（と目頭をおさえる）

松子　（駒代に）お部屋はあちらですの？

タキ　私がご案内しましょう。

駒代　おタキ様。

タキ　――――？

駒　代　おトーストにお紅茶はお召しあがりになりましたか？

タ　キ　……。

駒　代　油揚げがおきらいだそうで。おタキ様もお身体があまりお丈夫じゃないそうですから、どうぞご無理なさいませんように。

タ　キ　有難う。

タキと松子は奥へ去る。

駒　代　（急にいらいらして）おきよさん、おきよさん！

きよ子　（出てくる）は、はい。

駒　代　着替えるから、すぐに仕度をしておくれ。

きよ子　あの、喪服でございますか？

駒　代　喪服はお通夜のときでいいンだよ。今の目黒の恰好を見たかい。ふん、妾だと思って莫迦にしやがって。一緒にきて手伝っておくれ。

と去る。

廊下より田所が駆け込んでくる。

田所　専務ッ。専務はいらっしゃいませんか。専務！

奥より、重助が現われる。

重助　なんだ、騒々しい。こんなときに大声を出す奴があるか。

田所　大変なんです。今、事務所へ電話をしたら、債権者が大勢押しかけてるっていうんです。

重助　なに、債権者が？

田所　社長が亡くなれば会社はつぶれるだろうから、支払いは今のうちにきちんとしてほしいって――――専務、すぐに事務所へお帰り下さい。

奥から馬場が現われる。

馬場　専務、太陽産業に連絡がつきました。

重助　どうだった？

馬場　血も涙もないというのは奴らのことですよ。抵当期限は絶対に延ばせない。もし、どうしても明日までに返済出来ない場合は、約束通り、渋谷の奥様のお宅は頂戴すると言っているんです。

田所　渋谷のお宅？

重助　しッ。(と制して)一カ月も待てないというのか？

馬場　香典代りに三日だけ待ってやるというんです。

重助　香典代り？……よし、初七日が済むまでは、渋谷の奥様は勿論、ほかのだれにも、この話はもらしちゃいかん、分ったな。

二人は頷いて去る。　奥からまた鐘の音が聞えてくる。

重助　(写真を見つけて)……社長……えらいときにお亡くなりになりましたな。あのお三方をどうしたらよろしいのか……私は、お恨みに思いますよ。

――暗転――

第二場　目黒長者丸・武市家の居間

目黒長者丸にある松子の家。
いわゆる御本宅で、舞台は居間と、前面の中庭である。
正面奥に廊下が通り、上手は床の間で、花活けのほかに、壺などを置く。
室内には涼しげな簾と、軒先に風鈴。
庭の下手は蔦のからまった木戸で、ここを開けると、武市家の門へ行く。
苔むした庭先と、四季の草花が、ようやく翳りはじめた夏の午後の陽を浴びている。風に鳴る風鈴と、ひぐらしの声。
ややあって、八百政の店員の辰夫が庭木戸から入ってくる。

辰夫　お花さん、お花さん、八百政ですけど……お花さん。（東北弁である）

お花　（声）ここよッ。

辰夫　――――？

お花　（声）ここよ、ここ。今行くから、ちょっと待ってて。

軍手をはめた女中のお花（24）が掘り起したばかりの植木を抱えて現れる。

お花　ああ、暑い、うだっちゃった。

辰夫　なにしてたんです。

お花　納屋のまわりの植木をみんな引っこ抜いてたのよ、売っちゃったから。

辰夫　植木を売ったんですか？

お花　植木じゃないわよ、土地を売ったのよ。

辰夫　えッ、それじゃお花さん、いよいよ引越しですか？

お花　莫迦ね。引越しをしたら、私たちはどうするのさ。売ったのは、あすこの納屋のところだけよ。ね、ちょっと汗をふいてくれない。

辰夫　はい。（と手拭を出す）

お花　洗ったの、それ。

辰夫　大丈夫ですよ、先刻トマトを磨いてたんですから（と拭いてやる）……。

お花　私トマトじゃないわよ。

辰夫　やっぱり旦那さんが亡くなって、お金のほうが苦しいンですか？

お花　そりゃ以前のような訳にはいかないだろうけど、でも、うちの奥さんはがっちりして

いるからね。結構ためこんでいるわよ。なんといったってあんた、本妻だもの。こういうときは強いわよ、団扇をとって。

辰夫　はい。

お花　あんた、今日はなにを持ってきたの。

辰夫　ナスにトマトにかぼちゃです。

お花　煽いで。

辰夫　はい。（と煽いでやる）ねえ、お花さん、辞めるンなら、この辺が潮時じゃないンですかね。

お花　煽いで。

辰夫　ほかに勤め口はいくらでもあるンだし、それにうちの旦那は、お前が住込みが嫌なら、近くにアパート借りて、通ってきてもいいと言っているンです。

お花　じゃ、私がそのアパートに一緒に住むわけ？

辰夫　おれ、めしぐらい炊きますから。

お花　莫迦ね、あんた(と奥を伺い)いつかも話したでしょう。ここの奥さんは身寄りが一人もいないのよ。子供はいないし、親戚らしい親戚はないし、六十過ぎてこの世で一人ぼっちよ。おまけに、こんなに大きな家があって、お金があって、あとつぎがいない

のよ。もし奥さんがぽっくり逝ってしまったら、この家の財産はどうなると思う？

辰夫　どうなるって、人の家の財産じゃありませんか。

お花　でも、今、一番身近にいるのは私なのよ、私の出方次第によっては、どうころぶか分らないのよ。

辰夫　お花さん、それはいけないよ。いくらお金がほしくても、奥さんを殺せば只じゃ済みませんよッ。

お花　だれが奥さんを殺すと言ってるのよ、莫迦ね――あのね、ゆうべも奥さんは、私に肩を揉ませながら、こう言うのよ。あんたは優しくて、とても好い娘だから、いずれ私が……私がっていうのは、奥さんのことよ。いずれ私が、大学出の素晴らしいお婿さんを見つけてあげるからね。

辰夫　そりゃ駄目ですよッ、おれは怒るよッ。

お花　うるさいわね、これは話なのよ。それでね――聞いてなさいよ、ちゃんと。

辰夫　――。

お花　それでね、花嫁衣裳も、嫁入り道具も全部作ってあげるから、この家で、私と一緒に暮してね――そうなのよ、奥さんはそう云ったのよ。

辰夫　それじゃ、お花さんは養女って訳じゃないですか。

お花　そうよ、あんたはおむこさんよ。いくらお金があっても一人ぐらしは淋しいのよ。だったら、あんた、私たちだってその気になってがっぽり頂く方法を考えたほうがいいじゃないの。

廊下より松子と重助が入ってくる。

松子　なにががっぽりなんだい？

お花　え？　い、いえ、あの……今、お庭の土、がっぽり掘っていたところなんです。

松子　重助さんに、つめたい麦茶でも持ってきてあげなさい。

お花　はい。じゃ、八百屋さん、どうもご苦労さまでした。（と去る）

辰夫　毎度有難うございました。（去る）

ひぐらしの声

重助　いつ見ても、結構なお庭ですな。植木いじりが、社長のただひとつのお道楽でしたからな。

松子　もうひとつありましたよ。

重助　え？　あゝ、そうでした、ははは。

松子　でもまあ、四十九日もどうやら無事にすんだし、庭のはずれの土地も売れたし、私はこれでホッとしましたよ。

重助　しかし、相続税というのは馬鹿々々しいものですな。お年を召した奥様から、なさけ容赦もなく、莫大な税金を踏んだくっていくんですから。

松子　でも、土地を売ったおかげで税金は払えるし、社員たちの月給も払えたし、それになによりも、渋谷と神楽坂に縁切りすることが出来たんだから、まァ、我慢しなきゃァ。

重松　それより、どうしてますか、あの二人は？

松子　神楽坂のほうは、その後お変りはないようですが、問題は渋谷の奥様でございます。身体でもまた悪くなったの？

重松　いえいえ、お身体のほうは相変わらずですが、アパートなんかに移るのは、どうしても嫌だとおっしゃるンです。

松子　おどかしですよ。だってそのために、三十万円というお金を、私からお渡ししたじゃないの。

重松　いえ、お金ではなくて、渋谷のお宅を離れるのは嫌だとおっしゃるんです。

松子　でも、抵当に入って、人手に渡ったんだからしょうがないでしょう。

重松　その抵当という意味がよくお分りになっていないンですよ。一応、アパートも借りて、近くの民生委員の方にもお願いしてきましたが、奥様、縁切りとおっしゃっても、そこはやはりご親戚。しかもお一人でございます。なにかのときには、どうかご相談にのってあげて下さい。私からもお願いいたします。

お花が麦茶を運んでくる。

お花　どうもおそくなりまして。

松子　あんたね、今夜は重助さんが泊るかもしれないから、奥に仕度をしといてあげて。

重助　いえいえ、私はこれで失礼します。

松子　いいじゃないの。別に仕事はないンでしょう。

重助　仕事はございませんが、実は、今夜の夜行で鳥取へ帰ろうと思っているんです。

お花、下手廊下へ去る。

松子　えッ、じゃ、娘さんのところへ？

重助　向うへ行けば孫もおりますし、それに女房の墓もありますので、思いきって東京を離れる決心をいたしました。奥様には、長い間お世話になりまして……。

松子　だんだん淋しくなっちゃうわね。そう、鳥取へ帰るの。

重助　この年になりますと、働きたくても勤め口はないし、かりにあったとしても、身体のほうが、大分ガタがきておりますのでね。

松子　私ンとこに余裕があれば、重助さんの一人ぐらいは、どんなことをしてでも面倒をみてあげられるンだけど……本当に、長いおつき合いでしたねえ、あらためてお礼を云いますよ。

重助　とんでもない、私などはまだ身を寄せる肉親があるからいいようなものの、奥様は、これからは本当にお一人になります。どうか、くれぐれもお身体にはお気をつけて下さい。

松子　有難う。でも、女なんてのはずうずうしいというのか、薄情というのか、私ね、旦那が死んでから、まだ三月もたたないというのに、一貫目もふとっちゃったのよ。

重助　ふとった。そりゃまた不思議なご体質でございますなァ。

松子　考えてみれば、この三十年間、神楽坂と私は、どっちが本妻だか分らないような暮し

をしてきたんだけど、旦那が死んだとたんに、法律がみんな私に味方をしてくれてさ、家屋敷が、そっくり私の物になっちゃったじゃない。まるであんた、夢みたいですよ。

重助　しかし、お子様がおいでにならないのですから、さきゆきのことも少しはお考えになっておきませんと———。

松子　え、ええ、そりゃ考えてます。いずれは、しっかりした養子か、養女を迎えようと思ってますが、でも、当分の間は、のんびり温泉にでも浸って、今までの垢を綺麗さっぱり落してしまおうと思っているのよ。だってあんた、私の人生はこれからじゃないの、ほほ……。

その時、表でけたたましくトラックのクラクション。

松子　うるさいね。ピイピイ、ピイピイ。なんて非常識な車だろう。

庭木戸があいて、荷物を担いだ運送屋の千石と丸島が入ってくる。

千石　おい、とりあえずここへ置いとけ。

丸島　おいきた。

千石　おろすだけおろしちゃうからな、すぐ来いよ。

松子　ちょいと――あんたたちは一体どなた？

千石　運送屋ですよ。お宅は武市さんっていうんでしょう。

松子　ええ武市ですけど……その荷物はなんです？

千石　運んできたんですよ。

お花が慌しく入ってくる。

お花　奥様、渋谷の奥様がおみえでございます。

重助　なに、おタキ様が？

お花　お玄関に荷物をおろしていらっしゃるんです。(見て)あ、いらっしゃいました。

廊下より鳥籠をさげたタキが現われる。

タキ　こんにちは。

重助　おタキ様ッ、一体どうしたというのでございます。

タキ　私、今日から、こちらにお世話になりますから。

松子　なんですって。

タキ　あなたはお花さんとかおっしゃったわね。すいませんけど、お玄関の荷物を、奥の兄さんのお部屋に運んどいて下さらない。今日から私、あのお部屋で臥ませて頂きますから。

重助　ちょ、ちょっと――それではお話が違うじゃございませんか。私はアパートにお移り頂くように、お部屋まできめてきた筈でございますよ。それでは私が、こちらの奥様に嘘をついたことになります。

タキ　私は、アパートに移るとは一言も云っておりませんよ。

重助　しかし、渋谷のお宅は――。

タキ　人手に渡ったというんでしょう。ですから私はこちらへ来たんですよ。兄の家に、妹の私が住むのは当り前じゃありませんか。

松子　冗談おっしゃっちゃいけませんよ。兄々とおっしゃるけど、旦那と住んでいたのは私なんですよ。その私にことわりなしに、こんな荷物を運んでくるなんて――お花さん、運送屋さんにそういって、荷物をトラックに戻して頂戴ッ。

お花　はい。

タキ　駄目ですよッ、そんなことをしたら、警察を呼びますよッ。

松子　警察？

タキ　兄はね、私が身体が弱いので、お前のことは生涯面倒をみると、口癖のように云っていたのよ。だのにあなた方は、渋谷の私の家まで取りあげてしまったんじゃないの。

重助　取りあげたわけではございません。金ぐりに追われて社長がやむなく担保にいれたのでございます。

タキ　でも、私は武市浩蔵の妹ですよ。この世で、兄と血のつながっているただ一人の人間ですよ。本来なら、この家は、私の物になる筈です。

松子　莫迦なことを云っちゃいけませんよ。警察を呼ぼうが出るところへ出ようが、私が勝つにきまっているんです。ささ、お花さん、かまわないから、その人を表へ連れ出してくれ。

お花　奥さま、そういう訳でございますから、お荷物は私がお持ちいたしましょう。

タキ　なにするンです。（と鳥籠を前に突き出す）

お花　キャーッ。

重助　まあま、ちょっとお待ち下さい。奥様、如何でございましょうな。お腹も立ちましょ

うが、こちらさまはお部屋も随分と空いております。現に使ってないお部屋もあるのですから、この際、渋谷の奥様のために、一部屋あけてさしあげては――。

松子　冗談じゃありませんよ。借りたければ借りたいで、下手に出て、お願いしますとでも云うンなら話は別だけど、鳥籠なんかさげちゃって、ふんぞり返って、ここは私の家だもないもんだ。ああ駄目ですよ、おことわりですよ。

駒代　そうですとも、そうですとも。奥様のお怒りになるのは、それはごもっともでございますよッ。

重助　あ、奥さん。

争いの最中に、菓子折などを持った駒代が庭に来ていた。

駒代　そとで聞いちまったんですけどね、まァ、非常識というのか、ずうずうしいというのか、奥様でなくても、この私ですら怒り心頭に達しておりますわ。ちょいと、おタキ様、奥様にお詫びなさい。奥様を旦那様だと思って手を突いてお詫びをなさい。

タキ　あなたには関係のないことです。とにかく私は、今日からこの家へ住みますからね。

松子　そんなことは許しません。

タキ　あなたはこんな広い家に一人で住んでいるんですから困っている人を助けるのは当り前です。それが人間の義務というものですよ。

松子　私は、あなたに義務なんか感じません。

タキ　云っておきますがね、これからはあなたに、兄さんの奥さん面はさせませんよ。いつまでも夫婦だったっていうんですか。（と去る）

松子　まあ、お花さん、あの女を表へ放り出しておやり。

お花　でも奥さん、なんだか気持悪いですよ。

松子　一人増えれば、あなたの仕事も多くなるのよ。それでもいいの？

お花　はい。畜生ッ。（と去る）

重助　畜生だなんて、おいおい、手荒なことしちゃいかんよ。

松子　重助さん、これは全部あなたの責任ですよ。ちゃんと話をつけてきて下さい。

重助　しかし私は鳥取へ――。

松子　鳥取なんかいつでも行けます。

重助　は、はい。（と去る）

駒代　本当にまあ、なんて女でしょう。奥様さぞお腹立ちでございましょうねえ。

松子　私は昔から、あの人が嫌いだったのよ。

駒代　ええ、ええ、そうでしょうとも。あの手の女は誰にも好かれやしませんよ。自分勝手で、ずうずうしくて……六十にもなって男を知らないと、ああいう女が出来上がるんでございますよ。

松子　それ、本当なの？

駒代　おや、奥様はご存知ありませんでしたの？

松子　チラッとは、そんな話は聞いたことがあるけど、まさか。

駒代　当人がそう云っているんですから間違いございませんよ。若いときから身体が弱かったので結婚の経験が一度もない。だから私の身体は生娘みたいに綺麗なのよ、バージンなのよって、まるで私に当てつけるように吐かしやがったことがあるんですよ。へん、なにがバージンですか。当人はいばっていますがね、男がだれも相手にしてくれないので、仕方なしにバージンになっていたんですよ。第一、気持が悪いじゃありませんか、六十にもなってバージンだなんて――――だから私は電気クラゲだって云ってるんですよ。

松子　電気クラゲ？

駒代　ホラ、あのクラゲって奴は、寒天みたいにぬるぬるしてて、つかまえどこがなくて、そのくせ、さわると、ビリッとすごい毒を出すじゃありませんか。気持の悪いところ

なんかそっくりじゃありませんか。

松子　ほほほほ、電気クラゲとはうまいことを云ったわねえ、ほほほほ。

駒代　ほほほほ。

松子　(フト笑いをやめる)ところで、あなたはなにしに来たの？

駒代　え……？

松子　この近くに、お知合いの方でもいらっしゃるの？

駒代　ええまァ……あの……これ、めずらしくもございませんでしょうが、下谷の羽二重団子なんです。奥様がお好きだと伺っておりましたので。

松子　おや、まァ、わざわざすいませんねぇ、それじゃ遠慮なく……。

駒代　一度ご挨拶にと思っていたのですが、なにしろこの暑さでございましょう。昨日はとうとう、寒暖計が三十四度まであがったんですってねえ。

松子　まァ、三十四度も。

駒代　この分だと、今日も三十三度はございますわ。

松子　そうね。

駒代　おまけに毎日スモッグでございましょう、それに来年は東京でオリンピックがあるというのに、どうして東京の空は、こんなに汚れてしまったんでしょうね、本当に昔が

なつかしいですわ。

松子　本当にねえ。（二人は意味もなく笑う）

駒代　あの

松子　それで（同時に言う）

駒代　ほほ、どうぞ。

松子　いえ、あなたからどうぞ。

駒代　いえ、奥様からどうぞ。

松子　いいのよ、どうぞあなたから……。

駒代　そうですか、すいません、ほほほほ。あの、実は……私、奥様に喜んで頂きたいことがございますの。と申しますのは、実は昔のお知合いの方の口利きで、近く新橋に料理屋を出すことになりましたの。

松子　料理屋？

駒代　昔のお仲間というものは嬉しいものですね。私が遊んでいるというのを聞いて、わざわざ売りに出ているお店を紹介してくれたんです。そればかりじゃなくて、資金のめんどうまでみてくれるというものですから、私も思い切って決心したんですの。

松子　まァ、それはよかったじゃない、結構なお話じゃない。

駒代　はァ、おかげさまで――つきましてはですね、まことに厚かましいお願いなんですが、お店が出来るまでのほんの僅かな間ですが、こちらさまに置いて頂けないかと思いまして。

松子　えッ。私ンとこに？

駒代　いえいえ、ほんの一月ぐらいのもんです。まあ、奥さま、いい帯止めをしてらっしゃること……開店と同時に新橋へ移りますから。

松子　神楽坂のお宅はどうなったの？

駒代　あの家は、今月一杯で契約が切れるンでございます。奥様、いずれお店がうまく行くようになりましたら、きっと奥様にご恩返しをさせて頂きます。どうぞお願いいたします。

松子　でも、渋谷のあの女が来た上に、またあなたでは……。

廊下よりお花が入ってくる。

お花　奥様ッ、とても駄目ですよ。専務さんがあべこべに叱られているんです。

駒代　全くタチの悪い女だねえ。奥様、お任せ下さい。私がこちらに住めばもう安心でござ

います。

お花　えッ、住む？

駒代　あらお花さん、あなた綺麗になったわね。明日から私もご厄介になりますよ、どうぞよろしくね。

お花　えっ。（と云って、口を押える）

駒代　ほほほほ、では、ちょっとお部屋を拝見させて頂きます。まァまァ、本当に広くて、よくお掃除が行届いてますこと。ほほほほ。（と去る）

お花　奥様ッ。

お花はベタリと、その場に坐る。

――暗転――

第三場　武市家・台所

武市家の台所。
下手。勝手口のドアをあけると、すぐ土間で、そこから、板敷の台所になる。
正面は流し台、上手は暖簾を下げた出入口で、かたわらに食器棚などがある。
前場より一カ月後の宵である。
ガス台に薬罐がかかっている。
表通りを豆腐屋のラッパの音が通る。
やがて小鍋を持ったタキが、上手より現われる。
ガスを止めると、戸棚から醤油の壜を出して、醤油差しに移しかえようとするが、手をとめる。やがてエプロンのポケットから物差しを取り出し、醤油壜を計ってみる。
豆腐を買ったお花が、勝手口より入ってくる。

お　花　おタキ様、お豆腐屋さんがきてますよ。買うンなら早く行ったほうがいいですよ。

タ　キ　あなた、醤油を使ったでしょう。

お花　え？

タキ　私のお醤油よ。使ったんでしょう。

お花　知りませんよ。

タキ　だって、ゆうべ計ったときには十二センチあったのに今見たら八センチ三ミリに減ってるのよ。私は使ってないンだから、あなたのほかには居ないじゃないの。

お花　神楽坂の奥さんだって、ここで炊事をしているんですよ。

タキ　あの人はお夕飯はお店ですませてしまうし、それに昼間は店屋ものばかり取っているから、煮炊きはほとんどしません。

お花　それじゃ、きっと蒸発しちゃったんでしょう。

タキ　そんな莫迦なことって――返して下さい。減った分の四センチ七ミリを返して下さい。

お花　三センチ七ミリでしょう。

タキ　どっちでもいいから、すぐに返して下さい。でなかったら、警察に訴えますよ。

お花　へえ、お醤油の三センチや四センチで、いちいち警察に訴えるンですか。ああ、どうぞ訴えたかったら訴えて下さい。その代り私だって、うちのハムをチョロマカしたことをバラしてやるから。

タキ　チョロマカスだなんて、私はそんなはしたないまねはしませんよ。

お花　この目でちゃんと見たんですよ。この間の晩、そうっと台所へやってきてさ、こんなふうにしてあたりの様子を伺いながら、冷蔵庫のハムを出して切ってたでしょう。そいでさ、前掛けに、こういうふうにかくしてちょこちょこちょこってご自分の部屋に帰ったじゃありませんか。

タキ　知りませんよ。私は知りませんよ。

お花　ガスだって水道だって、只でジャンジャン使ってるくせに、訴えるもないもンですよ。返せとおっしゃるンなら、あとで一メートルぐらい返してあげますよ。

タキ　まあ、女中のくせに生意気なことを――。

お花　へん、居候のくせに、大きな顔をするない。

タキ　私は居候じゃありません。この家は、もともと私の家なんです。

辰夫が野菜を抱えて入ってくる。

辰夫　今晩は、どうもおそくなりまして。

お花　ああ。どうもご苦労さん。そこへ置いて頂戴。

タキ　私がお願いしたもの持ってきて下さった？

辰夫　はい、キウリが二本でしたね。一本が十円ですから、二十円になります。

タキ　十円？　それは高いわよ。こんな痩せたキウリが十円だなんて、駅前のマーケットに行けば、一本八円で売ってるわよ。

辰夫　しかし、どなたにも十円で売っているんですから。

お花　負けておやンなさいよ、二円ぐらい。養老院に寄附すると思ってさ。

タキ　なにが養老院です。じゃ、今、十六円持ってきますからね。(お花に)あなた、お醤油をちゃんと返して下さいよ。(と去る)

お花　本当に憎ったらしい婆だわ。お醤油を三センチ返せって云うンだから。三リットルじゃないのよ。三センチよ。

辰夫　あのお婆さんは、どこへ行っても鼻つまみですよ。この間も、うちへ水蜜を買いにきたんだけど、ならんでいる水蜜を、こうして指でひとつひとつ押すんですよ。押しては困ると云ったら、東京では、これを押すとは云わなくて、さわるって云うンだって、俺が東北の人間だと思って莫迦にしているンだよ。

お花　とにかく変っているからね。なにしろ、あの年でバージンだっていうんだもの。

辰夫　バージン？

お花　あんた、どう？

辰夫　うひーい！

お花　ほほほほ。(と甲高く笑うが、急に真顔になり)笑いごっちゃないのよ。あの婆さん、だれに聞いたのか、この間区役所へ行ってさ。ちゃっかり生活保護の申請書を出してきたんだって。どうやら、一生、この家に住むつもりらしいわよ。

辰夫　奥さんはなんにも云わないンですか。

お花　云ったってきくような相手じゃないし、それに頼りにしていた重助さんってお爺ちゃんが鳥取へ帰っちゃったもんだから、奥さんは、あとはもう死ぬのを待つだけだって云ってるのよ。

辰夫　もしもですよ、もしも奥さんの方が先に死ンじゃったらどうするんです。

お花　そのときは、乗っとられちゃうわね、この家。

辰夫　でも、もう一人、お妾さんがいるでしょう。

お花　あの人は一カ月って約束だから、黙っててもも今月中には引越しするわよ。問題は今の婆さんよ。あの婆さんを追い出さないことには養女の口もへったくれもないもの。ねえ、辰ちゃん、なんかいい方法はないかしら。

辰夫　さあ。

お花　さあなんて人ごとみたいに云わないでよ。婆さんを追い出せば、奥さんが喜ぶじゃない。今ここで、がっちり点数を稼いどけば、奥さんの信用が違ってくるものねえ、なんとかいい方法を考えてよ。

辰夫　そうですね。年寄りというのはお化けに弱いっていうから、旦那さんの幽霊に化けて、バアって脅したらどうでしょう。

お花　だれがお化けになるのよ。

辰夫　そりゃお花さんですよ。

お花　冗談じゃないわよ、あの婆さんに目をむかれたら、私の方が引っくり返っちゃうわよ。ねえ、もっとまじめに考えてよ。あんたは私と結婚したくないの。

辰夫　したいですよ。したいから、いつもお店の品物を余計運んでくるンじゃないですか。僕は、お花さんを愛しているんです。

お花　ねえ……。

辰夫　え……？

お花　ううん。（と唇を突き出す）

辰夫　こ、こんなところで……。

お花　いいじゃないの、だれも居ないンだから……。（二人は唇を合せる）

そこへタキが戻ってくるが、びっくりして顔を引っこめる。
が、再び暖簾から顔だけ出して、そっと見ている。

お花　ね、今度、泊りがけでどこかへ旅行しちゃおうか。
辰夫　もったいないですよ。お金が。
お花　あんたって夢がないわねえ。こんなところで逢ってたって気分が出ないじゃないの。

と又唇を合わせる。

辰夫　(気づく)アッ。
お花　あら、なによ、黙って見ているなんて、いやらしいわねえ。
タキ　私は知りませんよ。
お花　知りませんって、そこに立っていたンじゃないの。
タキ　立ってても、そんな不潔なものは私は見ませんよ。
辰夫　見ない人が、どうして不潔だなんてことを云うんですか。

タキ　知りませんよ。私は知りませんよ。はい、十五円。（と渡す）

辰夫　十六円ですよ。

タキ　十五円ですよ。

そこへ松子が入ってくる。

松子　お花さん、駒代さんは家にいるのかい。

お花　いえ、先刻美容院へ行くとかってお出かけになりましたよ。

松子　美容院？　じゃ、二階にいるのはだれかしら？

お花　二階？

松子　気がつかなかったかい。二階のあの人の部屋からテレビが聞えるンだよ、ガンガン。

タキ　ああ、それは私も知ってますよ。だからあなたに申しあげたでしょう、ああいう水商売の女は根がだらしがないから、平気でテレビなんかつけっ放しにするんです。気をつけないと、今に火事を出して、燃されてしまいますよ。

松子　あんたにそんなことを云われなくても、私は気をつけてます。でも、テレビの合間に、人の笑声が聞えるのよ。

お花　えッ。
松子　駒代さんは本当に出かけたんでしょうね。
お花　そうですよ、帰ってくれば分りますよ。
松子　いやだよ。じゃ、二階にいるのはだれだろう。
タキ　本当に人の声を聞いたんですか。
松子　ああ、テレビの声じゃないよ。たしかに人間の笑声だよ。
辰夫　お化けですよ、旦那さんの幽霊ですよ、出たんですよッ。
お花　キャーッ。
タキ　なにが幽霊です。この世にお化けなんか居るわけがないじゃないですか。
辰夫　でも、人間の笑い声が――。
タキ　だれかが居るンですよ。女ばかりの家だと思って、だれかがかってに上りこんだんですよ。私がちょっと見てきましょう。
松子　あんたが。
タキ　もし、空巣か泥棒だったら、大きな声を出しますからね。そうしたら、(辰夫に)あんたは、その辺の棒を持って、すぐに来て頂戴。お花さんは一一〇番に電話をするんです。分ったわね。

お花　おタキ様。おタキ様は怖くないンですか？

タキ　年をとると、怖いものはなくなるのよ。

辰夫　お化けもですか？

タキ　あなたは若いくせに、お化け、お化けって云うわね。お化けなら一番怖くないじゃないの。

辰夫　――――――（思わずお花と顔見合わせる）

松子　あんた一人で大丈夫かい。

タキ　……じゃ、ちょっと見てきますからね。（出刃包丁を手にとる）お花さんもあんたもいいわね。

二人　（気押されて頷く）

やがて出刃を握ったタキが暖簾の方へ歩き出す。

と、そこへ料理屋の女中のお常が花を抱えて入ってくる。

目の前の出刃を見て、悲鳴をあげて、その場に引っくり返る。

お常　た、助けて下さい。助けて！　人殺し！

松子　おタキさん、包丁包丁。人殺しだなんて変なことを云わないでおくれ。あんたこそ一体だれだい？　だれにことわって、この家へ入りこんだんだい？

お常　わ、私は……私は……この家の奥さんに頼まれて……。

松子　奥さん？　この家の奥さんというのは私一人ですよ。あんたの顔なんか知らないね。

お常　いえ、もう一人の奥さんです。

タキ　私だってあなたのことは知りませんよ。

お常　ヘッ？　そ、それじゃ、もう一人の奥さんです。

松子　ははあ、すると、あんたは駒代さんのお知合いかい？

お常　はい、お店のほうを手伝ってくれって頼まれたんです。だから私、お昼すぎにこちらへ伺ったら、奥さんは今から美容院へ行くから、帰るまで待ってなさい、どうせ明日からは、この家へ一緒に住むようになるンだから、自分の部屋だと思って、のんびりテレビでも見てなさい――。

松子　ちょいと、あんた今なんて言った？

お常　――。

松子　どうせ明日からは、この家へ一緒に住む？　だれが一緒に住むんだい？

お常　私です。

松子　私って――（と絶句して、思わずタキの顔を見る）

タキ　あなた、お店へ住むンでしょう。

お常　お店？　ほほほほ。新橋のお店は、間口が一間の、奥行が二間しかないんです。それもカウンターになってますから、寝るところなんか全然ないんです。

松子　（唖然として）……カウンターってなんだい？

お花　カウンターというのは、銀行の窓口みたいに、机がずらっと細長くなっているんです。そうなんでしょう、あんた。

お常　よくご存じですね。

お花　知ってるわよ、それぐらいのことは。奥さん、なにが料理屋です。つまりその辺のスタンドバーじゃありませんか。

松子　あんたは、この人を奥へ連れて行きなさい。

お花　はい。あとからあとから居候がどんどん増えちゃってこれじゃ、まるっきり計算が狂っちゃうじゃないの。

松子　なんの計算だい？

お花　え？　いえいえ――さあ、ぼやぼやしてないでさっさと来なさいよッ。

お常　（松子を見て）エヘヘ……よろしくお願いします。

お花はお常を促して奥へ去る。

辰夫　それじゃ、どうも毎度有難うございました（と去る）

タキ　……騙されたんですよ。一月だけだなんてお体裁を言ってたけど、ごらんなさい、手伝いの女中まで引っぱりこんでしまったじゃないの。

松子　……。

タキ　大体あの女は、兄さんのお妾だったのよ。あなたはあの女のために三十年も苦しンできたんでしょう。だのに、本妻のあなたが妾と一緒に暮すなんて、世間に聞えたらわらわれますよ。

松子　でも、料理屋を出すまでの間だっていうから。

タキ　そんなに景気のいいひとが、なぜこの家へころがりこんできたの。うわべじゃ奥様々々って調子のいいことを言ってるけど、かげではあなたのことをなんて言ってるかご存知？　かぼちゃ婆って言ってるのよ。

松子　カボチャ婆！？　まあ。

タキ　昔から人を騙して生きてきたような女ですからね。信用するのが間違いなのよ。

松子　でも、いくらなんでもかぼちゃだなんて……そういえばね、あんたのことも悪口言ってたわ。電気クラゲだって。

タキ　電気クラゲ、まあ。

松子　一月だけだというから置いてやったんだけど、向うがそんな了見なら、私もはっきり言ってやるよ。明日にでも、ここを出て行ってもらおう。本当にまあ、人を莫迦にするにも程があるよッ。

タキ　私が居たから、あなたもあぶないところで気がついたのよ。でなかったら、あの女に、この家を取られてしまうところだったわ。旦那を取られた上に、家まで取られたら、あなた、世間のいいわらいものになるわよ。

松子　ちきしょう。おタキさん、どうしてやろうかね。

タキ　どうしてやろうって、明日といわずに、今すぐにでも叩き出しておやんなさいよ、あなた、口惜しいでしょう。

松子　口惜しいのなんのって。おタキさん、手はじめに先刻の女中を追い出しちゃうから。あんたも一緒に手伝ってくれる？

タキ　ええ、ええ、喜んで手伝いますとも――

と二人が去ろうとしたとき、勝手口から、綺麗に髪をセットした駒代が現われる。
風呂敷包を抱えている。

駒代　ただ今――あら、奥様がお台所にいらっしゃるなんて、まあ、おめずらしい、ほほほ。いえね、奥様の前ですが、やはり少々お高くても、美容院は銀座に行かなくちゃだめですね。ここの近くで髪を染めてもらったんですが、なんだかどうも手際が悪くって……ほほほほ。なにしろうちのお客様は、社長さんや重役さんが多いものですから、髪型ひとつでも、なかなかうるそうございましてねえ、ほほほ。

タキ　社長さんや重役さんが、一間間口のスタンド・バーに飲みにくるの？

駒代　え……？

タキ　お座敷のない料理屋なんて、私、初めて聞いたわ。もっとも、奥行きが二間じゃ畳も敷けないでしょうけどね。

松子　駒代さん、気の毒だけど、今日かぎりで、この家を出て行ってもらいたいのよ。

駒代　えッ？

松子　訳はあなたがよくご存知でしょう。あなたの女中さんと一緒にすぐ出て行って下さい。よござんすね。

駒代　奥様ッ、藪から棒に、まァ、なんということを――。

タキ　あなたが居ると、家の中は騒ぎが絶えないし、第一、空気が汚れて不愉快ですよ。今すぐに、この家から出て行って下さい。

駒代　あんたにそんなこと言われる弱味はないよ。

松子　いいえ。私もおタキさんと同意見です。第一、あなただって、私のようなかぼちゃ婆と一緒では、なにかと不愉快でしょう。おたがいのためでしょう。よござんすね。出て行って頂きますよ。

駒代　ほほほほ。

松子　なにがおかしいンです。私は怒っているンですよ。あんな変な女中までこの家に住まわせるなんて――。

駒代　いえ、それは奥様の誤解ですわ。うちの女中がなにを申しあげたかは存じませんが、奥様にことわりなしに私がそんな勝手なことをするなんて――いえ、そりゃ今のお店は、たしかに一間間口のせまいものでございます。でも、すぐ近くに、本格的な料理屋を今、普請中なんでございますよ。

タキ　嘘ですよ。嘘にきまってますよッ。

駒代　嘘だと思うなら、あなたが見にくればいいじゃないの。第一、こんなことを嘘ついて、

一体なんの得があるっていうのさ。

松子　私は、もうあなたには騙されません。

駒代　奥さまでがまァ。それじゃ私、立つ瀬がございませんわ。今のお店は、それまでのつなぎなんでございますよ。本当に普請の最中なんですの。

お花が入ってくる。

お花　おタキ様、玄関に民生委員の人が来てますよ。（と去る）

タキ　騙されちゃいけませんよ。今度こそ、はっきりと追い出してやりなさい。（行きかけてふりむく）だまされちゃいけませんよ。

駒代　なに云ってるんだい。あんたなんかにそんなことを云われる筋合はないよ。（タキが去ると、その場にペタリと坐る）……奥様、私がどんなに奥様の御恩に感謝しているか、それだけはお分り頂きたいのでございますよ。今も、奥様に丁度お似合いだと思って、これを買ってきたばかりなんですの。（と風呂敷から、派手な反物を出す）その私が、どうして奥様を騙したりなんか致しましょう。ちょっと奥様、そのままでお当てになって下さいませ。

松子　いりませんよ、そんなもの。

駒代　まァま、そうおっしゃらずに、ちょっと、こちらをお向きになって下さいませ。私ね、表を歩いてて、ちょっと気に入った柄なんか見ると、すぐに、ああ、これは奥様にどうかしら？　お似合いになるかしら、どうかしら？　なんて、いつも考えるのは奥様のことばかりなんですの。まあ、よくお似合いですこと。

松子　こんな派手なものが似合うわけはないでしょう。

駒代　なにをおっしゃるんです。奥様はなんといっても、お姿がすらりとしてらっしゃるし、おまけに色が白いから、なにをお召しになっても、着物が引き立つんですわ。ほんとうにおうらやましいわ。

松子　(フッとその気になる)……派手ですよ、これはやっぱり。

駒代　なにが派手なものですか。奥様はまだまだお若いンですもの、これぐらいの物はお召しにならなきゃァ。奥様が派手だなんておっしゃるんでしたら、私はどうなるンでございます。

松子　……あなたは、いつも良い物をお召しになってるわね。

駒代　いやですわ、おからかいになっちゃァ。

松子　本当よ。着こなしもお上手だし……あら、あなたは香水をつけてらっしゃるの？

駒代　ええ、それはまァ、お客商売でございますから……でも着物をお召しになるのは、着こなしじゃございません。着る人にもともとそなわった品というものが大事なんですわ。その点、奥様は、なんといってもお品がよろしいし、女の私が見ても惚れぼれしますもの。まあ、本当によくお似合いですこと。

松子　そうかしら……。

駒代　そうですとも、少しおめかしをなすったら、どう見ても奥様は四十そこそこですわ。おうらやましいわ。

松子　そうかしら――(屹っとなる)駄目ですよ。いくらおだてたって、もうその手には乗りませんよ。

駒代　奥様ッ。

松子　駄目です。駄目です。もう騙されません、すぐに出て行って下さい。分りましたね。(と去る)

駒代　奥様――奥様ッ。

と追うが、あきらめて立止る。　溜息をついて、反物を床に叩きつける。

――暗転――

第四場　武市家・居間

居間の中央に鏡台が置いてある。
一隅の衣桁には、かなり派手な柄の着物が掛っている。そして鏡台のまわりには、たとう(畳紙)が数点ならんでいて、箪笥の引出しを開けっぱなし。
前場の夜ふけで、庭でこおろぎが鳴いている。
たとうをひろげる松子。
いそいそと、そのたとうを開こうとするが、フト、鏡台を見て、髪を直す。口紅をつける。やがてたとうの中から着物を出して、まず着てみる。手鏡をとって合わせて見る。
さて、次に、その着物を脱ごうとするが、考え直して別のたとうから出した着物を、さらにその上に着て、また同じように鏡台に写してみる。一枚一枚、たとうから出しては、松子は、着物の上に重ねて行く。柄は次第に、娘時代に着た派手な着物になって彼女の姿は着物を重ねるごとにだんだんふくらんでくる。
恍惚たるエクスタシーの状態で、松子は、鏡に写る自分の姿に見入っている。
上手から、いくぶんホロ酔いの駒代が、鮨折をさげて現われる。

異様な松子の姿に気づいて、思わずハッと息をのむ。
駒代と視線の合った松子は、まるで子供のような邪気の無さで、ニコリと笑う。
鬼気迫るようなその姿を見て、駒代は、言葉も出ないで、身体を小刻みに震わしている。やがて鮨折をその場に放り出すと、真蒼になって、もと来たほうへ駆け去る。
松子は、そんな駒代など、ほとんど意識にない。
もう一度鏡を見て、満足気にニヤリと笑う。

――幕――

第二幕

第一場　武市家・庭

前幕より約半年後。

正面は武市家のダイニング・ルームとベランダで、舞台前面は庭になる。

庭には藤椅子のほかに、小さなテーブルや椅子が置いてあり、そこここに春の花が咲いている。

ベランダには、赤いこうもり傘と椎茸が干してある。

雨上りの朝で、しきりに小鳥が鳴いている。

お常が、あたりの様子を伺いながら、そっと庭先から出てくる。

そして用意の笊に、手早く椎茸を放りこむ。

立去ろうとし、傘に気づく。ついでに傘を取ると、急いですぼめて去ろうとする。

お　花　　こらア、泥棒！

突然大きな声がして、洗濯物を抱えたお花が走りこんでくる。

お花　待てッ！（とお常を追って去る）

部屋の中から、外出姿の松子が、植木屋の田中と一緒に現われる。

松子　それじゃ新婚さんなのね。

田中　まだ新婚ホヤホヤでございます。いずれ二、三日うちにはお部屋を見せて頂きにくると思うのですが、人間のほうは私が保証いたしますから。

松子　私も、出来ることならお部屋なんか貸したくなかったんだけど、なにしろ、この物価高でしょう。先のことを考えると怖くなっちゃってね。

田中　今どき、お部屋を遊ばしているという手はございませんよ。いっそアパートにでもお建て替えになったらどうなんです。

松子　そうも考えたンだけど、うちには変な居候がいるでしょう、二組も。

田中　ですから、先刻申しあげたような方法で……。

お花が笊と傘を持って戻ってくる。

お花　奥様ッ。あのお常のアマと来たら――。

松子　（手で制する）

田中　では、私はこれで……。

松子　わざわざすいませんでしたね。おかみさんによろしく（田中は去る）どうしたの、そんな物を持って？

お花　どうしたもこうしたも、お常の奴が、椎茸と私の傘を盗みにきたんです。

松子　またかい。

お花　それも奥様、笊を持って、堂々と盗りにくるんですからね。これじゃ家の中は、まるで泥棒の巣みたいなものですよ。

松子　ちょいと。その笊もうちのじゃないのかい。

お花　え？

松子　ほら、この間あんたが無くなった無くなったって大騒ぎしていた？

お花　あッ、それじゃ盗んだ笊で、今度は椎茸を盗みにきたんだわ。奥様、私はもう知りませんよ。一月の約束が二月になり、二月がとうとう半年になっちゃったじゃありませんか。一体どうなさるおつもりなんです。

松子　あんた、すまないけどね。これを駒代さんに渡してきてくれないか。（とハンドバックより封筒を出し）半年分の部屋代の請求書だって。

お花　請求書？

松子　一月一万円ずつとして、半年で締めて六万円。今月中におさめてもらいますって、そう言ってきて頂戴。

お花　それは無理ですよ、部屋代をおさめるくらいなら、椎茸なんか盗みゃしませんよ。

松子　それなら、なおのこと都合がいいじゃないの。

お花　――――？

松子　今も植木屋さんに知恵をつけられたのよ。当節は力ずくで追い出そうとしたって駄目だから、ちゃんと手続き踏んだほうがいいって。ましてや半年も部屋代を払ってないンだから、裁判にかければ、奥さんのほうが絶対に勝つって、植木屋さんはそう言うのよ。

お花　じゃ、おタキ様からも頂くンですか。

松子　そりゃそうよ。払う払わないにかかわらず、今度はちゃんと一札入れてもらってね。立退きの期限をきめちまうのよ。そうなれば嫌も応もないじゃないか。そうだろう。

お花　じゃ、また以前のように、奥様と二人で暮せるようになるんですか。ああ、嬉しい。

松子　あんたは本当にやさしい子だね。私はなんだか他人とは思えないよ。

お花　奥様ッ。

松子　いずれはこの家も財産も、だれかしっかりした子にゆずろうと思っているンだけど、あんたのような人が私の娘になってくれたらどんなにいいかと思ってさ。本当よ。

お花　奥様、では私は、奥様の娘になったつもりで、今から六万円踏んだくってきますから。

松子　あんたは本当にやさしい子ねえ、じゃ、私はちょっと出掛けてくるから、あとをよろしく頼んだわね。

お花　はい。では、いってらっしゃいませ。お気をつけて。（松子は去る。見送ると急に張切って）ようし、あのキツネのヤロウ。（と去る）

小鳥の囀る声。

ややあって、サラリーマンの山田吾郎が妻君の和子と一緒に現われる。

山田　なかなか良い家じゃないか。

和子　戦前に建てたっていうから、どんなに古ぼけた家かと思ったら、そうでもないわね。木口もしっかりしてそうだし。

山田　まわりも静かだしな。

和子　私、お庭が気にいっちゃったわ。あらこれ、木瓜の花でしょう。綺麗ねえ。

山田　玄関のわきには、沈丁花や雪柳が植わってたよ。きっと花好きのお婆さんなんだろう。

和子　毎日、自分のお庭みたいなつもりで暮したら楽しいでしょうね。ねえ、思いきって決めちゃいましょうよ。お花が好きなお婆さんだなんて、それだけで人柄が分るような気がするじゃないの。

山田　しかし、どの部屋を貸してくれるのか、まず、それを見ないことには決めようがないよ。

和子　あら、でんでん虫がいる。

山田　どれどれ。本当だ。

和子　こっちにもいるわ。

そこへ買物籠を提げたタキが現われる。

タキ　なにしてるンです。

山田　え？

タキ　人の家に勝手に入りこんできて――なんのご用です。

山田　いえ、あの、実は僕たち、植木屋の田中さんの紹介で伺ったものなんです。失礼ですが、お婆ちゃまは武市さんでいらっしゃいますね。

タキ　ええ……武市ですけど……。

山田　申しおくれました。僕、山田と申します。これは家内です。

和子　初めまして――――――実は、今度の日曜日にお伺いするつもりでしたが、こういうことは早いほうがいいだろうと主人も申しますので、失礼とは存じましたが、今日突然お伺いしたんですの。もし、お差支えがございませんでしたら、お部屋をちょっと見せて頂けないかと思いまして……

タキ　お部屋？

山田　家内はもうすっかり気に入っちゃったんですよ。

和子　ほんとに閑静な、好いお住居でございますわ。もし貸して頂けるようでしたら、ねえ、あなた、敷金とお部屋代はお持ちになっているんでしょう。

山田　ああ、一応お金のほうも用意してきたんです。

タキ　じゃ、あなた方はお部屋を借りにきたお方？

山田　そうなんです。

和子　今どき、権利金なしでお部屋が借りられるなんて、本当に夢みたいですわ。あの、お部屋代と敷金、両方あわせて、たしか三万六千円でございましたわね。

タキ　えッ、三万六千円！

山田　田中さんからは、部屋代が一万二千円に、敷金が二つで合わせて三万六千円と伺ってきたんですが、それじゃいけなかったんでしょうか？

タキ　いえいえ、それでよろしいンですよ。私が田中さんにお話したのも三万六千円でした。まあ、わざわざ持ってきて下さったんですか、それはそれはご丁寧に……では、遠慮なく頂戴いたしましょう。

田中　い、いや、頂戴いたしましょうって、その前にお部屋を見せて頂かないことには(和子に) なア。

和子　そうねえ。

タキ　お部屋ですか……あの、田中さんはなんとおっしゃってました。

山田　田中さんはこちらへ伺えば分るって――お婆さん、お婆さんは本当に武市さんですか。

タキ　私が武市でなくて、だれが武市なんです。そうですよ。この家は私のものですよ。

和子　あなた、失礼よ。そんなことおっしゃるなんて。(タキに) すいません。いえ、あの、

主人はなにしろせっかちだものですから、お話がきまれば、すぐにも引越しをしたいと言ってるんですの。あの、その、お部屋というのは、下なんでしょうか。それともお二階なんでしょうか？

タキ　お二階？　そうそう、そうなんです。お二階なんです。

山田　二階ですか。

タキ　まだ人は住んでるンですけどね。いえ、住んでるといっても、なにしろ水商売の女だから、夜はおそいし、だらしがないし、それにあなた、半年もお部屋代を払わないんですから、近く出て行ってもらうことになっているんですの。南向きの、八畳でね、とってもいいお部屋なんです。

山田　しかし、その方はまだ住んでいらっしゃるんでしょう。

タキ　住んでても大丈夫ですよ。ぐずぐずいったら追い出しちゃって下さい。

和子　でも……ねえ、あなた、お二階だとお炊事するときにも不便だし……やっぱり下のほうがいいンじゃないかしら。

山田　そうだなァ、間借人が間借人を追い出すなんて余り聞いたことはないしなァ。残念だけど、あきらめるか。

和子　そうねぇ、お二階ではねえ……。

タキ　あの、下がよろしいのでしたら、良いお部屋が一つ空いてますよ。

和子　本当ですの？

タキ　ええ、ええ、中庭に面した、床の間つきのお部屋です。ここならもう、とっておきのお部屋ですからね。

山田　それ、見せて頂けますか？

タキ　いいですよ。ただね、借りたいという人が毎日のように来ますから、お気にいったら、すぐにお金を払って下さいね。でないと、ほかの人に貸してしまいますよ。

和子　では、よろしくお願いいたします。

山田　お願いします。

タキ　あなた方は本当に運がいいわよ。私はね、ひと目見たときから、ああ、あなた方にお部屋を貸そうと、心の中に決めてたんですから。ささ、どうぞこちらですから。

タキは二人を案内して去る。

裏口から辰夫が野菜を運んでくる。

辰夫　今日は、野菜をお届けにきました。お花さん、お花さん……しょうがねえなァ、あけ

っ放しで。じゃここへ置いて行きますよ。

辰夫は食堂に野菜を置くと、もと来たほうへ去ろうとする。

と、出合頭に、めっきり老けこんだ重助が、鞄を下げて現われる。

辰夫　(じろじろ見て)……あの……。

重助　――――――?(初めて気づいたように見る)

辰夫　お爺さんは、いつかお逢いした方ですね。

重助　……。

辰夫　ほら、半年ぐらい前に、奥の座敷の方で……覚えてませんか?

重助　ああ、ああ、その節はどうも大変失礼をいたしました。その後、おうちのみなさまにはお変りございませんですか。

辰夫　え……?

重助　それはようございましたな。なにしろ陽気が不順ですから、お身体にはくれぐれもお気をつけ下さるようにお伝え下さい。では。

辰夫　は? はァ。(と妙な顔をして去る)

重助はなつかしそうにあたりを見まわし、戸口から食堂の中を覗きこむ。
庭よりタキが、お札を数えながら戻ってくる。丁寧に、何度も数え直し、やがてそれをしまおうとして、重助に気づく。あわてて背中にかくす。

重助　おタキ様ではございませんか。
タキ　あら、重助さん。
重助　お久しぶりでございます。
タキ　まあ……いつ、こちらへ。
重助　ゆうべ着いたんでございます。みなさまにはお変りございませんですか。
タキ　ええ、まアおかげさまでね。
重助　どうしてらっしゃるか。いつもご案じ申しておりましたが、なにぶん筆不精だものですから、ついつい失礼してしまいまして……。
タキ　でも、お元気そうじゃない。こちらにはいつまでおいでになれるの？
重助　いえ、朝御飯は宿屋のほうで済まして参りましたから、どうぞご心配なく。
タキ　いえ、朝御飯じゃないのよ。東京にはいつまでおいでになれるのか、それをお伺いし

ているのよ。

重助　ああ、近頃は耳のほうが遠くなりましてな。はははは、実は鳥取には、もう帰らないつもりでございます。

タキ　――――――？

重助　実の娘も、一度嫁いでしまえば赤の他人、いえ、他人以上だということが、今度はしみじみと分りました。……恥をお話するようですが、実は娘に追い出されたのでございます。

タキ　追い出された？

重助　私が金融業に勤めておりましたので、娘はさぞ莫大な退職金を持って帰ると思ったんですな。その当が外れたために、毎日々々、嫌味ばかり。お婆ちゃんなら孫の子守もしてもらえるけど、お爺ちゃんでは役に立たないとか、政治家は六十すぎても大臣になるのに、うちのお爺ちゃんは六十すぎたらポンコツだとか、果ては、四国には、ポックリ寺というお寺があって、そこへお参りすると、長患いをしないでポックリ逝く、だからお爺ちゃんもお参りに行ったらどうだとか――――――さすがに私も腹がたって、とうとう娘の家を飛び出して参りました。

タキ　そう……それはお気の毒ねえ。

重助　だれも好きこのんで年をとるわけではないのに、実の娘がそれでございますからなア。

タキ　今の若い人は、自分たちだけは年をとらないと思っているんでしょう。そうそう、重助さんにいい物をあげましょう。（と籠の中から包紙を出して、あける）栗まんじゅうですよ。どうせこの近くで買ってきたんですからおいしくはないでしょうけど、さ、召上れ。（と手に持たせる）

重助　（涙ぐんで）人さまから、こんなに親切にして頂いたのは、久しぶりでございます。有難うございます。

タキ　なんですね。まんじゅうのひとつやふたつ――――あらあら、餡がこぼれましたよ。もったいないですよ。

重助　はいはい、もったいのうございます。（と拾って喰べる）おいしうございますなア。

タキ　重助さんもふしあわせなのねえ。今、お茶を持ってきてあげよう。

と立ちあがったとき、家の中から血相変えたお花が飛び出してくる。

お花　ちょっと、どいてどいて、畜生ッ。（棒など探す）

タキ　どうしたの。

お花　妾の奴が私の顔に塩をぶっかけたんですよッ。

タキ　お塩？

お花　立退かせようと思って掛合いに行ったら、いきなり私の顔に――――あら、重助さん。

重助　（呆気にとられて見ている）

お花　（タキに）口惜しいじゃありませんか、それもさ、お常の奴が私をこう壁に押しつけて、妾と二人で塩をぶっつけたんですよ。二人ともぶっ飛ばしてやるわ。（と傘を持つ）重助さん、あとでね。

タキ　あなた、ちょっとお待ちなさい。

お花　なんですよ。

タキ　こうもり傘はいけません。（と傘を取る）

重助　お花さん、おタキ様の言う通りになさい。喧嘩はいけません。

お花　でも、私は塩をぶつけられたのよ、二人がかりでこういう風にやられたのよ。

重助　いやいや、おタキ様の言う通りにすれば間違いない。お花さんは若いから……。

お花　年に関係ないわよ、私は奥様にたのまれて……。

タキ　コウモリ傘はいけません。

重助　そうです。おタキ様の云う通りコウモリ傘はいけません。

タキ　これで叩いておやんなさい。（とシャベルを差し出す）

重助　おタキ様、それはいけませんよ。喧嘩のお手伝いをするなんて、そんなはしたない。

タキ　いいンですよ。あんな女は痛い目にあわせなきゃ分らないんですよ。さあ、お花さん、これでしっかり頑張ってきなさい。

お花　はいッ！（と去る）

重助　ああーッ。

タキ　ほほほほ。どう、重助さん、おもしろいでしょう。今日は私にとっては、とても良い日だから、あとで重助さんに天丼をごちそうするわ。ほほほほ。

――暗転――

第二場　武市家・居間

居間の中央に紫の袱紗をひろげ、その上に厨子（ずし）を置いた駒代が、先程から手を合わせ、かなり芝居がかった大きな声で「南無大聖歓喜天」とお祈りしている。

前場の翌日。午前。

廊下より松子とお花が入ってきて、おもわず顔を見合わせる。

松子が咳ばらいする。

駒代　あら、これは奥様、気がつきませんでどうも失礼をいたしました。いえね、なんですか、奥様が大層な御立腹だと伺ったものですから、実は私、日頃信心をしておりますお聖天様に、こうしてお伺いをたてておりましたの。奥様にご不快な思いをさせたのは、日頃の私の修業が足りないからだ、そう思って、一心不乱に大聖歓喜天にお祈りをしたんでございます。

お花　見えすいてますよねえ、奥様。

駒代　なにが見えすいているンです、三十年も私が信心しているお聖天様ですよ。

お花　そんなに大事な神様を、なにもわざわざ奥様のお部屋へ持ち込むことはないでしょう。

一人で眺めて楽しんでいればいいじゃありませんか。

駒代　楽しむ？　楽しむために信心しているんじゃありません。お聖天様は水商売の神様なんです。

お花　なんの神様か知らないけど、ねえ奥様、あのお厨子の中になにが入ってると思います？　男と女が、こんなふうにからみ合って、抱きついてるお像が入ってるんですよ、ホホホホ。

駒代　（思わず顔色を変え）お花さん、あんたはこのお厨子の中を開けて見たの。

お花　（しまったと思う）

駒代　まあ、なんて罰当たりなことを。私ですら、お厨子の扉は開いたことはないんですよッ。あなた、罰が当りますよッ。目がつぶれますよッ。さ、ここへ来てお聖天様にお詫びなさい。

松子　まアま、お聖天様はともかくとして、あんたは昨日、この人に塩をぶつけたそうだね。

駒代　存知ませんね、そんなことは。

お花　お常と二人でやったじゃないの。

駒代　もしそうだとしたら、お聖天様の罰が当ったんでしょう。

お花　まア。

松子　では、あんたの言う通り罰が当ったことにしておきましょう。

お花　嫌ですよッ。こんな女が神様の代りだなんて。

駒代　こんな女とはなんです、こんな女とは。

お花　なによ。

松子　二人ともちょっと静かになさい。駒代さん、昨日お花さんに封筒を持って行ってもらったんだけど、あんたはそれをご覧になったんでしょうね。

駒代　それなんですよッ、まア、奥様ともあろうお方が、なんて水臭いことをなさるんだろうって、実は私、お恨みに思っておりましたのよ。

お花　まーた始まった。

駒代　なんだい。

お花　（その口調で）私、奥様のご恩に感謝しているのでございますよ。寝ても醒めても、思うのは奥様のことばかり、その私がどうして――――――。

お常、庭から出る。

お常　お内儀さん、これ届けてきますから。

お花　あら、ちょっと奥様、あの着物は、いつか奥様のために買ってきたとかいう、あの反物の柄にそっくりじゃありませんか。

松子　どうも、どっかで見た柄だと思ってたのよ。

お花　奥様、あれは女中の着物だったんですよ。

お常　女中の着物とは何よ、これはね、お内儀さんが、私のためにあつらえてくれたのよ。

駒代　い、いえ、とんでもない。これはですね、これはあの――――あんた、早く、早く行きなさいよ。あれはですね奥様。

松子　お花さん、あんたはお茶の間へ行って、例の物を持って来て頂戴。

お花　はい。あとで腰を抜かさないようにね、ふん。（と去る）南無大聖歓喜天〳〵。

駒代　奥様ッ。

松子　私はどうせ女中の着る物しか似合わないけれど、あなたはいい物お召しになってるわね。着物というのはやはり、着こなしよりも、その人にそなわった生まれついての品というのが大事なのね。その点、あなたなんかは、むかし大森で一、二と言われただけあって、さすが違うわ。

駒代　大森ではございません、赤坂でございます。

松子　そうそう、赤坂でしたわね。大森とは格が違うわねえ、ほほほほ。お店へ来る社長さ

んや重役さんたちは、なんて言ってらっしゃる。とてもお年には見えないって言うでしょう。

駒代　（急に泣き出す）

松子　――――どうなすって？　私、なにかお気にさわるようなことでも申し上げたかしら？

駒代　（首を振り）私、今さらながら、自分の甘えた気持に腹を立てているのでございます。奥様からお部屋代の請求を受ける前に、なぜ一言、お店の事情を奥様にお話ししておかなかったか、それが返す返すも悔まれてなりません。奥様は、私ごとき者に、お金のことでとやかくおっしゃるようなお方ではございません。決して、本気で、お部屋代を取り立てようなどとは、奥様は思ってはいらっしゃいません。

松子　（なにか言おうとする）

駒代　（かぶせて）いえ、そうです、そうに違いございません。奥様というお方は、お気持のお美しい、お金には至って淡泊なお方でございます。そこがまた、おタキなんかとはまるで違うところでございます。その奥様が、お部屋代などと、口にするだけでもけがらわしいことをおっしゃるのは、すべては、この私が至らないからでございます。実は新橋のお店のほうが、途中で大工を代えたりしたものですから、完成が延びに延

びてしまいまして、それを私、一言申し上げればよかったのでございます。

廊下より血相変えたタキが入ってくる。

タキ　お松さん、あなたはまア、なんという恥知らずなことをなさるんです。これですよッ。これは一体なんです。（と封筒を出す）今朝、お花さんが持ってきたんですよ。なんの気なしに開けてみたら、まあ、あなた半年分の部屋代の請求書が入ってるじゃありません。

駒代　えッ。それじゃおタキ様も？

タキ　あなたも貰ったの？

駒代　はい、これでございます。まア、同じ封筒でございますね。

タキ　あなたは仕方ないでしょうけど、私は武市家の人間ですよ。身内の者からお部屋代をとるなんて――――それも一ヶ月一万一千円で、半年で六万六千円だなんて、よくもこういう恥知らずなことが出来ますね。

駒代　ちょ、ちょっと、おタキ様、おタキ様は一万一千円でございますか。

タキ　そうですよ。

駒代　それはお高いですよ、暴利ですよ。私ンとこよりも千円高いじゃありませんか。

タキ　えッ、それじゃ、あんたのところは一万円？

駒代　しかも、お常さんと二人で住んでてでございますよ。

タキ　お松さん。

松子　なにを言ってるンです。高い安いは、部屋代を払っている人間の言うセリフですよ。只で半年間も居候しているくせに、恥知らずもないもんだ。

タキ　あなたは大体、私を莫迦にしているんです。一人住いの人間が、二人で暮してる人間よりもお部屋代が高いだなんて、私は、そういう差別は絶対に認めませんよ。

駒代　そうですとも、おタキ様のお怒りになるのはごもっともさまでございますよ。かりに、払う、払わないはともかくといたしまして、普通の計算でいけば、私どもの半分、つまり五千円でよろしいわけでございますもの。

タキ　そうでしょう。それが世間の常識というものですよ。

松子　なにが世間の常識です。私は可哀そうだと思うから、あんた方を置いてやったんです。文句を言われる筋合はこれっぽちもありませんよッ。ええ、よござんす、常識々々というのなら、世間の常識通り、居候は出て行ってもらいましょう。お二人とも、今すぐに、ここから出て行ってもらいましょう。

タキ　（そっぽを向いて）ふん、出て行け出て行けって、莫迦のひとつ覚えみたいに同じことばかり言って。

松子　なんですって……。

タキ　私は出て行きませんよ。

駒代　どうしてもとおっしゃるンでしたら、ねえ、おタキ様、立退料を頂きましょうよ。ねえ。

松子　た、立退料ですって？

駒代　それが世間の常識というものですよ。大体奥様は、いえ、もう奥様だなんて言いたくないね、こちらさまは、お一人でがっちり握っていらっしゃるンですから、今さらなにがお部屋代ですかよ。ねえ、おタキ様。

タキ　知らん顔をしていればいいのよ。あなたも出て行くことはありませんよ。兄に代って、私が認めてあげます。

駒代　有難うございます。

松子　（怒りに震えて）まア、二人ともなんて勝手なことを――――――。

廊下よりお花が入ってくる。

お花　本当にもう勝手なことばかり言って……聞いている私までむかむかしてきましたわ。奥様、これ、どういたしましょ。（と紙片を出す）

松子　かまわないから、二人に判をついてもらいなさい。

お花　おタキ様、そちらの奥さん、この誓約書に判を下さい。お手許になければ、私がお部屋へ行って押してきますから。

タキ　なんの誓約書？

松子　私も災難だと思って、お部屋代のほうはあきらめます。その代り、今月一杯でこの家を出て行くという約束をしてもらいたいのよ。半年間、只で置いてあげたんだから、あなた方も文句はないでしょう。

タキ　（駒代と顔見合わせると、二人は高らかに笑い出す）

お花　なにがおかしいンです。奥様は我慢に我慢を重ねていらっしゃるんですよ。世間のどこを見渡したってお二人のようなひどい店子はいませんよ。

駒代　女中のあんたが偉そうに出しゃばるンじゃないよ。

お花　女中、ほほほほ、お二人にちょっと言っておきますがね、私、今でこそお手伝をしてますけど、行く行くは奥様の――――いえ、そんなことはどうでもいいや、とにか

く、これに判を下さい。はい、こちらがおタキ様。こちらが新橋スタンド・バーの女将さん。

タキ　（いきなり誓約書を破る）

お花　あッ、なにするンです。

駒代　（これも続いて破る）

お花　あ。奥様ッ。

松子　おタキさん、駒代さん。

タキ　駒代さん、私のお部屋でお茶でも飲みましょう。

駒代　はいはい、そう致しましょう。

松子　お二人とも、ちょっとお待ちなさい。

と松子が腰を浮かしたとき、「ごめん下さい」と声があって、軽装の山田夫妻が、手にバケツや箒などを持って現われる。タキはギョッとなる。

山田　（タキを見て）あ、お婆ちゃん、昨日はどうも失礼しました。

和子　あれから、すぐに田中さんにお電話をしましたら、田中さんもとっても喜んで下さっ

たんですの。それであの、お引越は日曜日に決めたんですが、今日とりあえずお部屋のお掃除だけでもしておこうと思いまして……いえ、あの、お使いになっているンでしたら結構です。私たちはおそばでも喰べて参りますから。ねえ、あなた。

山田　うむ。どうぞごゆっくりお使いになってて下さい。別に急ぎませんから。じゃ。

和子　ええ。（と会釈して去ろうとする）

松子　あの、ちょっと――――――（タキがコソコソ逃げようとするので）おタキさん。

タキ　――――――。

松子　今、お引越といってましたけど、どなたがどこへお引越になるんです。

山田　どなたって、僕たちが、こちらへですよ。ねえ、お婆ちゃん。

タキ　――――――。

松子　おタキさん、あなたはどうしてこの方たちをご存知なの。私は引越の話なんて、まるで聞いてませんよ。

和子　お婆様、失礼ですが、ここにおいでのみなさま方はどなたさまなんです。お婆様のお友達かなんか？

松子　お友達だなんて。私はこの家の人間なんですよ。この家の持主です。

和子　まさか？

松子　なにがまさかです。嘘だと思うのなら、区役所でもどこへでも行って調べて下さい。私が正真正銘の――――（と言いかけて）おタキさん、それじゃあんたが、この人たちにお部屋を貸すと言ったのね？　そうなのね？

山田　一寸、おばあちゃん、あの……これは一体、どういうことになっているんです。

松子　どういうことになっているか、私のほうで聞きたいくらいですよ。先刻、田中さんっておっしゃってたけど、じゃ、あなた方が田中さんのご紹介の？

和子　そうですわ。こちらさまでお部屋をお貸し下さると聞いて、昨日、主人と二人でお伺いしたんですの。そうしたら、そのお婆様が、私が持主の武市だとおっしゃって。

山田　そうなんです。そうおっしゃって、このお部屋を貸して下さったんです。

松子　この部屋？　ここは私の部屋ですよ。

和子　そんな御冗談を。

松子　なにが冗談です。

山田　初めは二階の部屋だって言ったんです。

駒代　えッ、二階。

山田　そうなんですよ、水商売の、だらしのない女が住んでるから、あんたたちで叩き出してくれって言うんです。だから、それは嫌だって僕は言ったんです。そうしたら、こ

の部屋を見せてくれたんです。

駒代　おタキ様ッ。

松子　おタキさん。

和子　あの……なにか、いろいろと複雑なご事情がおありのようですけど、私たちも、はっきりして頂かないと困るんです。第一、敷金とお部屋代、合計三万六千円をお渡してあるんですもの。

松子　えッ、お金までも。おタキさん、それはあんた、本当なの？

和子　本当も嘘も、現にこうして、仮の領収書まで頂いてます。じゃ、私たちはどうなるんです？　お金は払ったけど、引越は出来ないっていうんですか？　そんな莫迦な話って――――。

松子　いえいえお部屋はね、お部屋は玄関わきの六畳の間を一応予定してたんです。

山田　玄関わき？　僕たちはこの部屋が気にいったんです。

松子　ここを貸したら、私の寝るところが無くなっちゃうんですよッ。（前へタキを引っぱり出す）おタキさん、あんたは本当にひどいことをしてくれたわね。私にことわりなしにお金を取るなんて……あんたは泥棒ですよ。とにかく、お金を返して頂戴ッ。

タキ　……。

松子　なぜ黙ってるのよ、返すのが当然でしょう。

タキ　（上目使いに松子を見る）

松子　なんですよ、こんな目して、なんでそんな目で私を睨むのよ。あんたは自分のしたことが良いことだとでも思ってるの？　え、おタキさん。

タキ　（小声で）バカ。（と言うと去る）

松子　まア、バカだなんて。お花さん、すぐに行ってお金を貰ってきて頂戴ッ。（山田夫婦に）あなた方には決して悪いようにはしませんから、ちょっと待ってて下さいね。（お花が立っているので）お花さん、なにしてるのよッ。

お花　奥様。

松子　――――？

お花　奥様は私に嘘をおつきになりましたわね。

松子　――――。

お花　私と二人きりで、また昔のように静かに暮らせるようになる……そう奥様はおっしゃいましたわ。人さまにお部屋を貸すなんてことは、私には一言もおっしゃいませんでしたわ。そんな養女ってあるかしら？（と去る）

駒代　養女？

松子　お花さん、お花さん！（夫婦に）ちょっと待ってて下さいね。お部屋は必ずお貸ししますからね。でもこの部屋じゃありませんよ。お花さん！（と去る）

駒代　……（立上る）……老婆心ながら申しあげときますけど、この家は、なにしろあんなヘンテコな年寄が多いから、引越ししてきても、落ち着いて夫婦生活は出来ないと思いますよ。（と去る）

山田　……おい、どうする。

和子　どうするって、なんだか変なところへ来ちゃったわね。

山田　変なとこって、お前が決めるって言ったんじゃないか。

和子　だって植木屋さんから聞いて来たのはあなたじゃないの。

山田　決めるって言ったのはお前だよ。

和子　あなただって賛成したじゃないの。

山田　賛成はしたけど、だいたいお前が。

和子　お金はどうするの、お金は。あんた男らしくないわよ。（と突き飛ばす）

山田　何するんだよ。

庭より、古ぼけた乳母車に荷物をのせた重助が、押しながら現われる。

和子　あの……。

重助　……。

和子　失礼ですが、お爺ちゃまもこのお家のお方ですか？

重助　え？　ああ、その節はどうも大変失礼をいたしました。その後、おうちのみなさまにはお変りございませんですか？

和子　えッ？

重助　それはようございましたな。なにしろ陽気が不順でございますから、お身体にはくれぐれもお気をつけ下さるようにとお伝え下さい。では。（と乳母車を押して去る）

夫婦は呆気にとられて見送っている。

――暗転――

第三場　武市家・庭

その年の秋。

テラスの椅子に坐った辰夫が、トランジスター・ラジオから流れてくる(東京オリンピックの)実況放送に聞きいっている。

かたわらのテーブルでは、重助が先刻から丹念に宝くじを数えている。

重助　ラジオをちょっと止めてくれないかな。うるさくて、数が数えられないよ。

辰夫　でも、東京オリンピックですよ、今が選手入場で、最高にいいところなんだ。

重助　オリンピックかなんか知らんが、間違えたら、一枚百円の損だからね。ええと三枚でしたね。

辰夫　五枚ですよッ。

重助　ああ、五枚か。ええ、ひい、ふう、みい、よう、いつ……。

辰夫　お爺さんは随分手つきがいいですねえ。

重助　へへ、そりゃ、あんた、今でこそ宝くじを売ってるけど、むかしはこうやって十万、二十万とお札を勘定してたもんですよ。どんなに急いでいるときも、私が勘定をする

と、一銭一厘の間違いがなくて、そりゃ、あんた、銀行以上だと言われたくらいですよ。三枚でしたね。

辰夫　五枚ですよッ。

重助　あゝ、そうでした。はい、五枚。

辰夫　じゃ、お金。（と渡すが）お爺さん。これ四枚しかないよ。ホラ。

重助　そんなことはないですよ。私は銀行以上だって――――――はい。（と一枚渡す）

辰夫　しかし、これから寒くなると、宝くじを売るのも大変ですねえ。今、駅前に出ているンでしょう。

重助　年をとると、なかなか勤め口もありませんのでね、まア、いい案配に世話してくれる人がいたので、なんとか喰べるだけはやってますけど、ただ、どういうわけか、私の売る宝くじは、なかなか当らなくてねえ。

辰夫　えッ。

重助　今までに最高に当って千円がたった一枚。だから私も自分の宝くじだけは買わないことにしてるんです。

辰夫　そ、そんな、売っちゃってから、そんなことを言うなんて。

重助　でも、十枚ならべて買えば、必ず二枚は当りますよ、五十円が。

辰夫　当り前ですよッ。

食堂からお花が出てくる。

辰夫　どうだった？

お花　どうもこうもないわよ。私は奥さんに騙されたのよ、利用されたのよ。あんな分らず屋のしみったれだとは思わなかったわ。退職金っていったら、それなあにだってさ。

辰夫　だからお花さんも、あまり欲ばらないほうがいいって言ったでしょう。

お花　欲ばってなんかいないわよ。当然の権利じゃない。おまけに、花嫁衣裳のハの字も言わないのよ。自分の都合で暇をとるんだから、決めたお給料だけにして頂きますってさ。本当にもう、白々しいったらありゃしない。

重助　お花さん、あんたは結婚するのかね。

お花　え？　あら、重助さんには言わなかったかしら。

重助　いや。

お花　そうだった？　あら、やだ、恥ずかしいわ。

重助　別に恥ずかしいことはないよ。じゃ、この八百屋さんと？

お花　ええ……実は、この人のご主人が、今度、厚木のマーケットにお店を出すので、そのお店をこの人が任されることになったんです。だから私もこの辺でいい機会だと思って、二人で決めたんです。

重助　そう、それはよかった。おめでとう。

お花　重助さんにもいろいろお世話になりまして、有難うございました。

辰夫　厚木に移ったらご連絡しますけど、お爺さんもどうかお元気で……。

重助　有難う。あんた方もおしあわせにね。

お花　……(辰夫に)じゃ、荷物を整理するから手伝って。

辰夫　ああ。

重助　お花さん。

お花　――――――？

重助　お祝というほどのものじゃないンだが……これ、私のほんの気持だから。（と宝くじを出す）

お花　いいわよ、そんな。商売物じゃないの。

重助　いや、あんたには、洗濯をしてもらったり、おかずをときどき分けてもらったり、随分世話になったからね。どうか、これ……その代り、きっと当らないよ。

お花　（ベソ掻いて）すいません、じゃ、遠慮なく頂戴します。

辰夫　有難うございます。

重助　奥さんはね、あんたが出て行くので淋しいのだよ。きっと淋しいに違いないンだよ。だから子供のように拗ねているンだよ。そう思って、奥さんを恨まないようにね。

お花　……（黙って、辰夫と共に去る）

重助は宝くじを鞄の中にしまう。
食堂より外出姿の駒代が現われる。

駒代　おや、これからお出かけ？

重助　へい。

駒代　ねえねえ重助さん、あんたのお知合いで、だれか株を買う人はいないかしら、株？

重助　今、八百屋が来てましたけど……。

駒代　その株じゃないのよッ、あんたは鳥取から帰ってきたら急にボケちゃったわね。ホラ、生前、よく旦那がやっていたでしょう、あの株よ。

重助　ああ、あの造船とか、電機とかの……。

駒代　そうそう、その電機株が、今、すごい値上がりをしているンだって。だれか買う人がいるンだったら、私、紹介するけど……。

重助　そんなに値上がりしているンなら、奥さんがお買いになったら？

駒代　株を買うほどのお金があるンなら、あんたから一枚百円の宝くじなんか買わないでしょう（くじを出して）ごらんなさい、これ、この前、あんたから買った宝くじよ。あんたは、今年はオリンピックで、オリンピックは五輪のマークで、だから五の数字が縁起が良いっていうから私は末尾の五ばかりを十枚買ったんだよ。そうしたらみんなパアじゃないの、五十円もつかないじゃないの。

重助　あとで奥さんに、大事なことを一つ言い忘れていたんです。後家は五の数字は買うなって――――――。

駒代　なに言ってるのよ。おかげで私は、これから金策ですよ。いそがしいったらありゃしない。

そこへイカの入った袋を提げたタキが現われる。

駒代　重助さん、じゃ、私はちょっと髪結さんに行ってきますからね、株が売れたら重助さ

ん、百万ぐらいどさっとあげるよ。（と歩き出すが、タキが道をゆずらずにそこに立っているので、二人は睨み合う恰好になる）……どいて下さいよ。おどきなさいよ。

タキ　私が通ろうとした道を、あなたも通ろうとなさるから、だから、あなたがおどきになればよろしいの。

駒代　（なにか言いかけるが、急に大仰に顔をしかめて）おお、臭い。なにをお買いになったか知らないけど、嫌な匂い。重助さん、あんたは匂わないの？

重助　さア……そういえばボケの花でしょうかな、良い匂いがします。

駒代　あなたは鼻のほうもボケてきたんじゃないの。おお、嫌な匂い、これじゃ、どくなといわれてもどきたくなりますよ。はい、ちょっと、ごめんなさいよ。

タキ　そんなに嫌な匂いかしら？　あなただって、たまにはこれを召上るンでしょう。（とダラリと足の下がった烏賊を出す）

駒代　（一瞬沈黙。やがて、キャーと叫んであたふたと駆け去る）おゝ臭い、おゝ臭い。

タキ　……バカ。……あの人は大きなことばかり言ってるけど、お店のほうがうまく行ってないのよ。

重助　新しい料理屋というのはどうなったんでしょう。

タキ　嘘ですよ、嘘にきまってますよ。でも、その嘘も通らなくなったから、そろそろこの

家を出るんじゃないかしら。

重助　本当でございますか。

タキ　そうなればお二階の部屋が空くから、あなたがそこにお移りになればいいのよ。

重助　とんでもない。裏の納屋には、畳を三枚もいれて頂いたのですから。

タキ　寒くなったら身体にこたえますよ、お松さんには私から言っておきますから。いえ、あんな人にいちいちことわらなくてもみんな勝手に住んでいるンですから、あなたもそうなさい。

重助　しかし、母屋のほうには奥様を初めとして、ご婦人方ばかりが住んでいらっしゃいます。その、美しい花園へ、私のような男性が一人で移りますと、世間の噂も如何かと思いますので……。

タキ　そうなのよ、それを私も心配しているのよ。

重助　ハア。

タキ　いくら私たちが、綺麗に、身を慎んでいても、世間の噂というのは怖いですからね。それでなくても、あなた、独身の女が三人一緒に住んでいるというだけで、世の殿方というのは、みだらな好奇心を持ちますからね。

重助　ごもっともさまで。

タキ　重助さんも、その点は充分に気をつけて、かりにも人さまからうしろ指をさされないように暮して下さいよ。では、お仕事、気をつけていってらっしゃいよ。

重助　有難うございます。

タキは下手へ去る。重助は空を見上げ、やがて食堂へ去る。

戸外で車の停る音。

重助が傘を持って現われる。そして下手へ行きかける。と、

「おばあちゃま、お待ちなさい」と声があがる。

――――そこへ、髪ふり乱したタキが悲鳴をあげながら駆け戻ってくる。

続いて老人ホームの係員山川と常見が現われる。

タキ　帰って下さい、帰って下さい！　私は嫌ですよッ、そんな話は聞いてませんよッ、あ、重助さん。

重助　どうなさったんです。

タキ　こ、この人たちが、私を連れて行こうとするンです。

重助　連れて行く？　どこへ？

山川　お婆ちゃまはなにか誤解してらっしゃるンですわ。あの申しおくれました。私たちは福祉事務所から参った者です。

重助　福祉事務所？

常見　そちらのお婆ちゃまが八王子の老人ホームに入所なさると言うので、私たち、お迎えにあがったんです。

タキ　知りませんよ。私はそんなところへ行くなんて頼んだ覚えはありません。人違いですよッ。

山川　でも、お婆さまは武市タキさんとおっしゃるンでしょう。

タキ　違います、私はそんな名前じゃありません。

常見　でも、先刻はそうですっておっしゃったじゃありませんか。

タキ　違います、違います。

重助　いや、この方は、たしかに武市タキさんですが、しかし一体どなたが老人ホームにそんなことを頼んだんです。

松子　私ですよ。

と松子が食堂より出てくる。

重助　えッ、奥様が？

タキ　お松さん。

松子　私もいろいろと考えたんですけどね、ひとつ家の中で、毎日々々、角つき合って暮しているよりは、いっそはっきり別れてしまったほうが、おたがいのためだと思ったのよ。それには老人ホームが一番いいと思ってね、この夏、手続きをとって、費用のほうも私から出しといたンです。

重助　しかし、いくらおたがいのためだとおっしゃっても、かんじんのおタキ様にことわりなしに、そんなことなさるなんて。

松子　話して、納得するような人じゃないから仕方がないでしょう（二人に）荷物はあとから送りますから、ともかくお願いします。

タキ　嫌です、私は行きませんよッ。

下手よりお花、ややあって辰夫が現われる。

山川　お婆さま、老人ホームといっても、決して堅苦しいところじゃないンですよ、お仲間

もたくさんいらっしゃるし、それに、お炊事もお洗濯も、みんなホームでやってくれるから、お婆さまは毎日、ご自分の好きなことしてらっしゃればいいのよ。お婆さまはなにがお好き？　民謡なんかはどう？

タキ　大嫌いッ。

山川　それじゃお花のお手入れとか、小鳥さんの世話とか……。

タキ　きらいきらい！　みんなきらい！

常見　とにかく、見学するつもりでご一緒にいらっしゃったら？　それでもし、お気にいらなかったら、そのときはまたあらためてご相談しましょうよ。ね。

山川　そうしましょう。じゃ、私たちも一緒にお仕度を手伝いますから。

常見　さア、お婆ちゃま、行きましょう。

タキ　いやですよッ。放して、放して下さい！（と常見の腕を噛む）

常見　痛い、なにするの。

松子　まあ、なんてひどいことを。かまわないから連れて行って下さい。いつもその調子なんですよ。

重助　ちょ、ちょっと待って下さい。

松子　重助さん。

重助　いえ、たとえ奥様の仰せでも、それだけはいけません。私は不承知でございます。私は反対でございます。

松子　あんたにそんなことを言う権利はない筈ですよ。

重助　権利とか義務とか、そんなことよりも、これでは地下の旦那様がお嘆きでございますよ。

お花　重助さん、重助さんは先刻奥様は淋しいから拗ねていらっしゃるンだと言ったわね。なにが淋しいものですか。奥様はみんなを追い出して、自分一人でのうのうと暮したいのよ。欲ばりのしみったれよ。

松子　なんだって？

重助　まっま、奥様のお気持も分らないじゃありませんけどしかし、こうやって、無理に追い出すようなことをなさったら、あとで奥様は、お心のどこかが、きっとお痛みになるに違いありません。いえ、きっとそうです。

松子　……。

重助　奥様、これをごらん下さい。（おタキから受取った烏賊を指さし）この烏賊は、おタキ様がご飯のおかずに買ってきたものでございます。お年を召してお一人でたった一匹のイカをお買いになってきて自炊をなさる、私もご同様でございますから、偉そう

なことは言えませんが。しかし世間の人たちはなんという淋しい暮しだろうと思うに違いありません。けど、そう思われても、おタキ様は、やはりみなさまとご一緒にこちらさまに居たいのでございますよ。きっとその方が、ご自分ではおしあわせだと思っているに違いありません。奥様、かりにもお身内じゃございませんか、どうか仲良くお暮しになって下さい。追い出された人間の悲しさは、私が一番よく知っております。

お花　（ワッと泣き出して）……重助さん……私、一生懸命やるからね。この人と一緒に仲良くやるからね……宝くじのお祝を、本当にありがとう。もし当ったら……そういうことはないと思うけど、でも、もし当ったら重助さんに半分あげるからね。……じゃ行こうか。

辰夫　奥さん、どうも長い間お世話になりまして……。

お花　いいんだよ、そんなこと言わなくったって。

辰夫　だって、あんた――――――。

お花　いいんだってば、じゃ、重助さん……いつまでもお元気でね。

重助　あんたらも、しあわせにね。

お花　さようなら。……行こう。

とお花は目頭をおさえて辰夫と去る。
山川と常見も顔見合わせて、黙って去る。
松子も去る。
自動車の走り去る音。

タキ　重助さん、どうも有難う。（烏賊を受け取る）
重助　……。
タキ　でも、私はやっぱり老人ホームへ行ったほうがいいかも知れませんね。
重助　おタキ様。

タキはそのまま去る。
重助は鼻をすすり、見送る。

―暗転―

第四場　武市家・食堂

武市家の食堂。
夕暮の窓外に小雪が降っている。
お常が寿司を食卓の上にならべている。
一隅に、ダンボール箱が置いてあって、その中に一升びんや鍋や笊などが入っている。
かすかに、目黒不動の鐘が聞えてくる。ややあって松子が現われる。

松子　（耳を澄まして）……お不動様の鐘が、今日はずいぶん近くに聞えるね。みんなどうしたの？

お常　さあ。

松子　お夕飯をごちそうするからって、あれほど言っといたのに――――駒代さんはもう起きているんでしょう？

お常　起きてはいますけど、顔が熱っぽいンですって。

松子　ほほほ、顔がかぶれるほど白毛染を使うからよ。ほほほ（ダンボールを見て）なんだ

い、あれは？

お常　先刻、おタキさんが整理してたんです。明日、老人ホームへ持って行くンじゃないンですか。

松子　……。

お常　あの、仕度はもうこれでいいですか。

松子　少し寒いから、ストーブを強くしといて。

お常　そんなことはご自分でやればいいでしょう、私だって今日かぎりでお店を辞めるンです。お気のどくだからカレンダーだけはめくってあげましょう。先月のまんまになってますからね。（と去る）

松子は仕方なく石油ストーブを調整する。そこへおタキが入ってくる。

タキ　あの……。

松子　あら、待ってたのよ、ささ、どうぞこちらへ。……重助さんは？

タキ　馬場さんから電話がかかってきたの。どうやら寮の掃除人の口がきまったらしいのよ。以前、兄さんの会社で世話になったから、馬場さんも心配して奔走したンでしょう。

松子　そう……まアとにかく今日はお別れの会なんだから、坐って頂戴よ。重助さん、重助さん、電話がすんだら早くいらっしゃい。ささ、おタキさん。

タキ　お松さん――――私ね、そんなつもりじゃなかったんだけど、今、荷物の整理をしていたら、これが出てきたのよ。

松子　あら、その断ち鋏は？

タキ　忘れてたのよ、盗むつもりじゃなかったのよ。長いこと、お借りしたままで、本当にすいませんでした。

松子　……わざわざ返しにこなくてもよかったのに。うちにはもうひとつあるから、それはホームへ持って行きなさいよ。

タキ　でも、悪いから。

松子　いいわよ。鋏の一つや二つ。まア、立ってないでお坐ンなさいよ。

タキ　ええ……それからね。これも盗むつもりじゃなかったんだけど……。

松子　まだなんかあるの？

タキ　体温計に、物差し、それから箪笥の鍵なんです。

松子　……。

タキ　お茶の間で拾ったのよ。でも、一度も開けたりはしませんでしたから……。

松子　そう……じゃ、鍵はこっちへ貰っとくけど、物差しと体温計はあんたにあげます。

タキ　でも、飛ぶ鳥は跡を濁さずといいますから……。

松子　今さらそんなことを言っても手おくれよ。まア、いいから、とにかくお坐ンなさい。今、駒代さんもくるから、そうしたら重助さんと四人で、仲良く御飯でも食べましょう。

タキ　駒代さんは、いつお引越なさるって？

松子　お店に畳を入れたから、いつでも引越できるそうだけど、なにしろ、あの顔でしょう。こんなに腫れちゃって――――だから腫れが引くまで待ってくれって言うのよ。

駒代　（声）奥さん、すいませんけど、ちょっとドアをあけて頂けませんか？

松子　（二人見合う）

駒代　（声）ドアの把手に手が届かないンですよッ。すいませんけど……。

松子はタキと顔見合わせる。そしてドアを開ける。顔を腫らした駒代が、這うようにして現われる。

駒代　どうもすいません。

松子　どうしたの、あんた？

駒代　いえね。今、階段をおりてきたら、途中で急に足がガクガクとなっちゃって、廊下を這ってきたんです。

タキ　大丈夫？

松子　熱があるんじゃないの。

駒代　丸三日も寝てたから、身体がフラフラしているんです。（手を貸そうとする松子に）いえ、大丈夫です。ちょっとめまいがしただけなんですから……。

松子　災難だったわねえ。

駒代　銀座の美容院といっても、近頃は信用できませんよ。まさかこんなお岩さんみたいになるとは思ってもみませんでしたからね。本当にもう、腹が立って、腹が立って――――おかげで、引越の予定は狂っちゃうし、店は閉めたままだし、……そうそう引越といえば、おタキ様はいよいよ明日でしたわね。

タキ　あなたにもずいぶんお世話になったわね。ご一緒に暮したこの一年が、まるで夢のようだわ。

駒代　ほんとに、過ぎてしまえば夢ですね。おタキさまにはずいぶんと失礼なことばかり言って、さぞ、お気を悪くなさっているでしょうけど、どうか勘弁して下さいましね。

タキ　なにを言うンです。私のほうこそ、あなたには意地悪ばかりして、本当に済まないと思っているんです。どうか今までのことは水に流して、許して下さいね。

駒代　そんなふうに言われると、私、困っちゃいますよ。（と涙ぐんで）私がこちらさまにご厄介になったばかりに、いつもいつも騒ぎの種を私が蒔いていたんですから……

松子　奥様やおタキ様には、本当に申しわけないと思っていたんです。

駒代　まアま、もうそういうしめっぽい話はいいじゃないの。重助さんには悪いけど、お先にいただきましょう。ささ、今、お茶を入れますから、お二人ともどうぞ召し上がれ。あの……勝手を申し上げるようですけど、これ、お二階で頂いてはいけませんかしら……？

松子　気分でも悪いの？

駒代　なんですか、熱っぽいんですよ。まだ。おタキ様すいませんね。勝手を言っちゃって。

タキ　いえいえ、ご無理をなすっちゃいけないわ。私も明日の朝が早いから、実はそうさせて頂こうと思ってたの。

松子　なによ、お二人とも、せっかく私が仕度をしたんじゃないの。

タキ　でも、まだ荷物の整理が残っているから。

松子　あとで私も手伝ってあげるわね。一年も一緒に暮してて、三人がこうしてご飯を喰べ

るなんて初めてじゃないの。おタキさんにとっては、最後の晩なんだから、三人で仲良くご飯を喰べようよッ。ね、駒代さん、ほんの二、三十分じゃないの。

そこへお常が入ってくる。

お常　女将さん、お給料の精算をお願いします。私、これでおいとましますから。

駒代　あゝ、すぐ行くから、ちょっと待ってて。（お常は「本当に払ってくれるンでしょうね」と言って去る）……すいません、奥様、（寿司をとる）じゃこれ頂戴しますから。

松子　……。

風の音。

タキ　あんたにはいろいろとご迷惑をおかけしたけど、これからは、おたがい、一人で暮していかなきゃならないンだから、お身体には気をつけて、いつまでもお元気でね。

松子　――――――。

タキ　私も八王子へ移ってしまったら、もう多分二度とお逢い出来ないと思うのよ。思い出

したら、お手紙の一本も頂戴。私も書くから。

松子　そ、そんな縁起でもないことを――――。

タキ　でも、おたがいにもう年ですもの。じゃ、これ、有難く頂戴するわ……駒代さん、明日の朝は早いからご挨拶ぬきで失礼しますからね。

駒代　いえ、お送りしますよ、私、きっとお見送りしますから……。

タキ　ありがとう、お大事にね。（と去る）

駒代　奥さん、頂いていきます。（と去る）

風の音。

一人になった松子は、急に寂莫たる孤独感に襲われる。

がっくりと肩を落し、椅子に座る。

遠く国電の通過音。

松子は鮨に手をのばして一口食べる。

そっと涙をふく。

ややあって重助が入ってくる。

重助　……。

松子　……。

重助　おタキ様の荷物を運びますから……。

松子　あんた、馬場さんのお話というのはどうなったの。

重助　はい、おかげさまで、来月から寮へ移ることになりました。

松子　そう……それはよかったわね。

重助は一隅の荷物を持って去る。

風の音――――――

松子は立上ると、財布を出す。そしてお礼を丹念に数えると、紙に包んでダンボールの箱の中に入れる。

そこへタキと、続いて重助が入ってくる。

タキ　(険しい表情で)なにしてるんです。

松子　(びっくりして振向く)

タキ　今さら、私の荷物を調べることはないじゃありませんか。それはみんなお台所の道具

ですよッ。

松子　いえ、あの、それは――――。

タキ　私はね、せめてお別れの晩だけは気持よく過ごしたいと思って、お借りしていたものを、恥をしのんで、みんなお返ししたのよ。それをあなたときたら、そんな箱の中まで、いちいち手をつっこんで調べるなんて――――。

駒代が空のすし桶を提げて入ってくる。

松子　違うのよ。それは違うのよッ。

タキ　違いません。私はちゃんとこの目で見てたんです。

駒代　それは奥様、あなたがいけませんよッ。お別れの晩だから、三人仲良くご飯を食べましょうと言ったのは、奥様ですよ。そんな綺麗ごとを言っといて、裏へ廻れば荷物を調べる。それじゃおタキ様がお怒りになるのは当り前ですよ。

松子　違うのよ、そうじゃないのよッ。

タキ　違う違うってあなたは言うけど、現にこうやって、手をつっこんで……(と言って、箱の中から紙包みをつまみ出す)……あら(とお礼を見つける。びっくりして、三人の顔

をみる）

重助　で、では、奥様が……？

松子　（急に泣き出す）……行かないで……みんなどこへも行かないで……。

三人　――――――？

松子　私が悪かったら謝るからさ、おタキさんも、駒代さんも、重助さんも、みんなどこへも行かないでおくれ。お願いだから、私を一人ぼっちにしないでおくれ。お願いだよ……お願いだよ……。（と子供のようにエンエン泣く）

三人は唖然として顔見合わせる。

重助　しかし、出て行けとおっしゃったのは奥様でございますよ。

松子　だから謝ると言ってるじゃないの。みんなに出て行かれたら、私はこれから先、どうしていいか分らないよ。

重助　でも、お顔を合わせれば、のべつまくなしに喧嘩をしていらっしゃるのですから……。

松子　（泣きじゃくりつつ）喧嘩をするのは、仲がいいから喧嘩をするンじゃないか。

重助　仲が悪いから喧嘩をするのでございましょう。

松子　男のあなたにはわからないのよ。本当は私たちは仲がいいのよ。ねえ、おタキさん、そうだね。駒代さん、そうだね。ふたりともお願いだからここに居ておくれ。私が悪かったよ。お願いだからここに居ておくれ、お願いだよ。（と泣く）

重助　……どう致しましょう。

駒代　今になって、急にそんなことを言われてもねえ。

松子　そんな無慈悲なこと言わないでおくれよ。おタキさん何とか言っておくれ。

タキ　……あんたは本当に悪いと気がついたンなら、まあ居てあげないでもないけどさ。

松子　気がついたわよ。眼が覚めたわよッ。

重助　このご様子を伺っていると、かなり気がついてるようですな。では、お可哀そうだから、居てあげましょうか。おタキ様、如何でございましょう。

タキ　私だって、別に好きでホームへ行くんじゃないんだから、お松さんが本当に心を入れ替えるというのなら、まア、いいわよ。

重助　奥さんは……？

駒代　私は根が涙もろいほうだから、それほどまでに頼むンなら居てあげてもいいけど、でも、お部屋代だなんてことは二度と口にしないこったね。

松子　しない。しない、絶対にしない。この家は私たち四人のものだよ。それでいいでしょ

う。

重助　では、今まで通り、居てあげることにしましょう。

松子　有難う。有難う。

重助　その代り、もう金輪際、喧嘩だけはして下さいますな。よろしゅうございますな。

松子　ああ、分ってるとも。ささ、そうと話がきまったら、あらためて一緒にご飯でも――――そうそう、仲直りのお祝いだから、みんなでビールでも飲みましょうよ。お中元にいただいたビールがまだ残っているんですよ。重助さん、悪いけど、手伝ってくれない。

タキ　いいわよ、私がやりますから。

駒代　おタキ様、私が――――。

タキ　あなたはまだお身体がはっきりしないンだから……コップはこれかしら？

松子　ああ、すいませんね。そうそう、それよ。ええと、栓抜きは……？

タキ　鍋の中。

駒代　ありました。あら、これはうちの店の。

松子　（栓を抜いて）では……重助さんから。

重助　いえ、私は……。

松子　まアま、殿方から先に……。

駒代　奥様、私がやりましょう、私、慣れておりますから……。（一同に注ぐ）

松子　では……ええ……なんと言ったらいいのかしら？

重助　仲良くやりましょうでいいじゃありませんか。

松子　そうね、では、あらためて、みなさん。

皆々　なかよくやりましょう。（と一同笑ってビールを飲む）

タキ　そうそう、これはあなたにお返ししておきましょう。（お札を返す）

松子　いいわよ、一たん出したんだから。

タキ　でも悪いから。

松子　そう。確かに。（受け取る）

重助　これでよろしいのですよ。これで地下の亡き社長もさぞお喜びでございましょう。もし、このまま、御三方が散り散りになってしまわれたら、社長はきっと、この世に思いが残って、成仏出来なかろうと思います。さしあたり奥様なぞは、一人寝の床で、夜な夜なうなされることでございましょう。

松子　嫌なことを言わないでよ。

駒代　旦那のお化けはともかくとしてさ、これだけのお宅で一人暮しなさるのは、なにかと

物騒ですよ。

タキ　そうそう、いくら年寄りでも、私たちが居たからお松さんも気丈夫だったのよ。泥棒だって、それを知ってるから入らなかったのよ。

駒代　泥棒ぐらいならまだしも、もっとすごい奴が入ったらえらいことですよ。奥様は本当にあぶないところだったわねえ。

松子　いえ、そりゃね、あんたたちが居なくなったあとのことぐらいは私だって考えてましたよ。ここを売って、今はやりのマンションに移ろうと思っていたんですもの。

タキ　マンション？

松子　マンションなら鍵一つで安全ですもの。

駒代　奥様がマンションで、おタキさまは老人ホームですか。それこそ旦那が化けておでになるかもしれませんねえ。

タキ　私は反対ですね、兄のこの家を売るだなんて、そんなことはさせませんよ。

松子　させませんって、私の自由でしょう。

タキ　あなたはまだそんなことをおっしゃるの。ここは兄の家ですよ、私には権利があるンですよッ。

松子　あなたは新聞も読まないから、法律というものを知らないのよッ。嘘だと思うなら私

のハンコでここを売ってみましょうか？　すぐ売れるンですよ。マンションだってすぐに買えるんですよッ。

タキ　お松さん。

松子　なんですよッ。

重助　いい加減になさいませんか。喧嘩しないという口の下から、すぐにこれだ。おタキ様、駒代様、やはりこの家は出ることにいたしましょう。

タキ　そうしましょう。

松子　ああ、ちょっと待って、ごめんなさい、ごめんなさい。もう二度としませんから……おタキさん、ごめんなさい。重助さんも駒代さんも坐って頂戴ッ。本当に私ってのはバカだからねえ……重助さん、もう一度仲直りをしましょう。乾杯しましょう。

重助　またですか？

松子　今度はみんなで歌でも歌いましょう、そうしましょう。おタキさん、駒代さん、では又、あらためて、皆さん。

一同　仲良くやりましょう。

松子　おタキさん、なんの歌がいいかしら？ビールはまだいくらでもありますよ。　ね、駒代さん、あなたはよく知ってらっしゃるでしょう。なんの歌がいいかしら。

駒代　歌を歌う気分じゃありませんねえ。

松子　まア、そんなことを言わないで……ああ、そうそう、鉄道唱歌なら、みんなよく知っているでしょう。

重助　ああ、あれは子供のときよく歌いましたなア。

松子　重助さん、あんた、ちょっと歌ってみてくれない。さあさ、これ飲んで。

重助　そうですか……では、思い出しながら、やってみますか。

松子　（手を叩く）

重助　（歌い出す）汽笛一声新橋を、はや我汽車は離れたり。

松子　ちょっとお唄の途中でまことに失礼だけど――――その離れたりってのは嫌な言葉ねえ。

重助　しかし、これは歌の文句でございますからね。

松子　でも離れるなんて、なんだか縁起が悪いじゃない。

重助　では……ええ、はや我汽車は動いたりというのはどうでしょう。

松子　それがいいわ、それが。それでもう一度初めから歌ってみてよ。いやあ、もっとお飲みになってね。

重助　いや結構でございます。忘れんうちに唄いましょう……汽笛一声新橋を、はや我汽車

は動いたり、愛宕の山の入りのこる、月を旅路の友として。

松子　いい文句ねえ、旅路の友だってさ。まるで私たちみたいじゃないか。さア、それじゃ初めからもう一度、みんなで歌いましょう。

重助　そうですな、では、おタキ様も駒代さまもよろしうございますか。今夜はひとつ賑やかにやりましょう。

松子　そうそう、そうしましょう。

（やがて老人四人は、〝鉄道唱歌〟を歌い出す。）

――幕――

第三幕

第一場　武市家・門前

前幕より約十年後（つまりほぼ現在）武市家の門と、その前の道。
石塀は、ところどころが剥げ落ち、門には貫板が打ちつけてある。屋敷の背後には工事中のマンションが建ち、電柱には選挙ポスターが貼ってある。
初夏――――午後。
工事の騒音。
近所の人が通る。
選挙カーから聞こえてくる声。

声　地元のみなさま、こちらは都議会議員候補者〇〇〇〇の宣伝カーでございます。今晩七時より城南会館に於て個人演説会を開催いたしますので、ご近所おさそいあわせの上、ご来場下さいませ。（と去る）

辰夫がやってくる。

辰夫　（門を見て）おおい。（と振りむいて手をふる）

お花が一人娘の正子（8）と手をつないで現われる。

辰夫　この家じゃなかったか。

お花　！……そうだわ。へえ、なつかしいなア。向うから見たらマンションの陰になっているからてっきり無くなっちゃってると思った。

辰夫　しかし、ずいぶんくたびれちゃったなア。

お花　だって、あれからもう十年だもの。（正子に）お母さんね、むかし、このお家に住んでいたのよ。

正子　ここで生まれたの？

お花　生まれたのは別のところだけどさ、つまり、ここの家で働いてたの。

辰夫　そこへお父さんが来て、知合いになったンだよ。

正子　どういうふうにして？

辰夫　どういうふうにって……お母さんはこの家でお手伝さんをしていて、お父さんは八百

屋の御用聞きでしょっちゅう出入りしていたから、そこで自然に仲良くなったんだ。

お花　そんなこまかいことまでいちいち言わなくたっていいのよ。

辰夫　それは違うよ、子供が知りたがっていることは、面倒臭がらずに教えてやれって、この間、テレビでそういってたんだ。

正子　ね、どういうふうにして知合いになったの。

辰夫　ホラみろ、聞きたがっているじゃないか。

お花　お父さんがね、用もないのに、しょっちゅうお母さんのところへやってきてさ、それで、頼みもしないのに、お店のナスやキウリや大根を、どんどん黙って運んできたの。

正子　それから口をきくようになったの。分った？

お花　つまり、レンアイね。

辰夫　まア、そうね。

お花　おい、表札は昔から無かったかね。

辰夫　あったわよ、武市って、苗字だけの表札が。

お花　それじゃ、やっぱり居なくなっちゃったのかな。

辰夫　そうだと思うわ、だって、かりに奥様が生きていらっしゃったとしても、もう七十すぎよ。お一人でこんな家に住んでいるわけがないじゃないの。第一、見てごらんなさ

いよ、この門を。板なんか打ちつけちゃって。人が住んでる家じゃないわよ。いずれマンションでも建つんじゃないの。

辰夫　じゃ、あの奥さんはやっぱり亡くなったのかなア。

お花　うん、年だからね。

辰夫　せっかく、この近くに引越してきたのに……おいこのお土産はどうしよう。

お花　あんたの昔のご主人に持って行ってあげたら。そのうち、奥様のお墓でも分ったら、三人でお参りに行ってあげましょうよ。

辰夫　そうだな、なんだかんだ言っても、いろいろとお世話になったからな。じゃ、行くかな。

お花　マーちゃん、行きましょう。

と、歩み出す。

そこへ買物籠を提げた重助が、うつむき加減にトボトボとやってくる。

辰夫が思わず足をとめる。

辰夫　おい、あ、あのお爺さん、ほら、なんとかいったな、ほら……。

お　花　　重助さん。

重助全く気がつかずに、くぐり戸をあけて屋敷の中に去る。

辰　夫　　す、住んでいるンだよ。

お　花　　生きてるんだわ。

二人は呆然と屋敷を見る。

―暗転―

第二場　武市家・庭

荒廃した武市家のテラスと庭である。
マンションの建築現場から間断なく工事音が聞えてくる。
軒に鳥籠が吊してあるが、小鳥の姿は見えない。
庭の植込のところでは、先程からこちらに背を向けた松子が、しゃがみこんで草むしりをしている。
ややあって重助が入ってくる。

重助　奥様、ハンペンは品切れだそうでございます。
松子　なにを買ってきたの。それで。
重助　アジでございます。
松子　（立上ってこちらを向く）お魚は駄目だと言ったでしょう。ピイピイがあるから危ないって。
重助　奥様、ピーチェーバーでございます。
松子　そのピーピーピーがあるから危ないって、テレビでも言ってたじゃありませんか。

重助　でも、風船をくれましたので……。

松子　風船は喰べられませんよ。本当に子どもみたいになっちゃったんだから……。

そこへ正子を連れた辰夫とお花がおそるおそる入ってくる。

お花　（息をのむ）……奥様ッ。

松子　……どなた？

お花　私でございます。お忘れですか？　ホラ、十年前にこちらさまにご厄介になっておりました花でございます。

松子　……ハナ……。

お花　女中の花でございますよッ。

松子　ああ、ああ、……あなた、お花さん。

お花　おなつかしうございます。一度是非お伺いしようと思っていたのですが、ついお店のほうがいそがしくて……重助さん、しばらくです。覚えていますか？

重助　ハア、その節はどうも大変失礼をいたしました。その後おうちのみなさまにはお変りございませんか。

松子　なにを言ってるのよ。お花さんよ。ホラ、むかしうちに素頓狂な女中さんがいたでしょう。あの子よ。

重助　――――（やっと気づく）ああ、お花さん……。

お花　はい。

重助　八百屋さん。

辰夫　はい、しばらくです。

重助　するとこのお子さんは……？

お花　私たちの子供です。まあちゃん（と子供を呼ぶ）正子といいます。さア、ご挨拶しなさい。

正子　今日は。

松子　はいはい今日は。……まア、こんなに大きな娘さんが……年をとるわけだねえ。

お花　実は、今度この近くに、ちっぽけな八百屋のお店を出すことになったんです。それであの、奥さまたちはどうしていらっしゃるかしらと思って、それでお伺いしたんですの。あの、これ、つまらない物ですけど……（と土産を差し出す）

松子　まア、ご丁寧にすいませんね。では、遠慮なく。

辰夫　この辺もずいぶん変りましたねえ。くる途中、マンションがニョキニョキ建っている

ので、ちょっと分らなかったですよ。

重助　今も隣に建っているのですがね。変らないのはこちらさまだけですよ。（と食堂へ去る）

松子　お嬢ちゃん、ささ、ここへ来て、お坐りなさい。

お花　あの……それじゃ今は、奥様と重助さんのお二人でお暮しになっているんですか。

松子　え？　ああ、私たちですか、私たちは――――。

と言いかけたとき、駒代が小唄を口ずさみながら上手から現われる。

駒代　奥様、今、ざっと売上げを計算してみたんですけどね。どう低く見積もっても、一日二十万ぐらいは。

松子　ちょ、ちょっと駒代さん。

駒代　いえ、場所が場所ですもの。赤坂ですもの――――えッ？（松子が駒代に耳うちする。言われて、びっくりしたようにお花を見る）……あら、本当だ。お花さん。

お花　お久しぶりです。

駒代　あら嫌だよ。まア、それならそれで一言いって下されば、赤坂のお店に仕度させとい

たのに……まアまア、しばらくね。お花さん。

お花　奥さんもお変りありませんで……。

重助は、この間に食堂に去る。

駒代　ええ、ええ、当節はいそがしくてね。身体がいくつあっても足りないのよ。それにしてもあなた、ちょっと電話でも下されば車を廻したのに……困ったわね。仕度もなにもしてなくて……そうそう、今、お茶をいれますからね。これでも召上れ。（と土産の包みを解こうとする）

松子　ああ、それはね。

駒代　いいじゃありませんか。（包紙を見て）ホワイト・パン店、ああ、バス停のところのパン屋さんね。あすこのケーキはおいしくないのよ。安かろう、まずかろうでね。

松子　ちょいと。それはおもたせよ。お花さんのお土産よ。

駒代　え。

お花　いえ、どうぞみなさんで召上って下さい。私たちは結構ですから、どうぞ。

駒代　ほほほほ、すいませんね。では、遠慮なく頂戴しましょう。

お花　私、お茶をいれてきましょう。
松子　いいのよ。お花さん。
お花　お台所はよく知っていますから。
松子　お茶っ葉を切らしちゃってるのよ。
お花　……そうですか。
松子　はい。お嬢ちゃん、おもたせで悪いけど……。
正子　どうも有難う。
駒代　（むしゃむしゃ喰べながら）これはね、奥様、バーム・クーヘンというンですよ。私、このお菓子が大好きでね、赤坂のお店へ行くとよくお店の子に買ってきてもらうンです。ああ、おいしい。
辰夫　奥さんは、赤坂にもお店をお出しになったんですか？
駒代　あら、ご存知なかった？
辰夫　ハア。

松子が手真似でパアだと教える。
辰夫もお花も納得。

駒代　料理屋は、やはり赤坂にかぎりますね。なんと云ったって客種が違いますもの。よろしかったら一度ご招待しますよ。ええ、ええ、ご遠慮なさることはありませんよ。ああ、おいしい。

食堂からおタキが、鳥餌の摺鉢を持って現われる。続いて重助が戻ってくる。

タキ　（お花を見て）あら、本当だ。

お花　おタキ様ッ。

重助　私の言った通りでしょう。なんでも疑ってかかるのがおタキ様の悪い癖でございますよ。

タキ　でも、まさか生きているとは思わなかったわ。

お花　えッ？

タキ　お松さん、こうして私たちを頼ってきたんだから、この際、面倒をみてあげたらどんなものかしらね。

松子　え……？

タキ　そりゃ、むかしのことを言い出せばキリはないけど、こうしてお子さんも出来ちゃったし、見れば暮しにも困っているようだから、可哀そうじゃないですか。

松子　なにを言ってるのよ。お花さんたちは今度あたらしく八百屋のお店を出したのよ。あの通りお土産まで頂いたのよ。

タキ　まア……それじゃ、うちで儲けたお金でお店を出したのね。そうなのね。

辰夫　違いますよ。こちらさまでは、あべこべに損ばかりしていたんですよッ。

駒代　八百屋さんの損なんてのは、たかが知れてますよ、はばかりながら、私ンとこじゃ一日の売上が二十万だからね、二十万。

タキ　そんなに売上げがあるのなら、早く私たちを温泉に連れて行って下さいよ。十年間、おなじことばかり言ってるンだから……あなたは進歩がないわね。

松子　しょうがないでしょう。三年前に松沢病院から帰ってきたんだから……第一、そういうあなただって進歩がないじゃないの。

タキ　おや、どうして？

松子　小鳥が逃げちゃったのに、毎日毎日餌を作って。

タキ　あれは逃げたんじゃありません、遊びに行ってるンです。

松子　小鳥が一ヶ月も遊びに行ってるの？

タキ　今にきっと帰ってきます。
松子　帰ってくるものですか。
タキ　帰ってきます。
松子　帰ってきません。
駒代　いえいえ、それはわかりませんよ。一度離れたお客は、そう、おいそれとは帰ってきませんよ。そこがお客商売のむずかしいところですよ。ええ。
重助　まアま、まア、そういうこみいったお話はあとにして、ともかく、このお土産を仲良く頂戴しようじゃありませんか。
タキ　そう、そう、そうですね。
松子　そうしましょう。そうしましょう。
重助　はい奥様。
松子　私はあとでいただくわ。
駒代　じゃあ、その分私が。

とクーヘンを手にとる。
辰夫とお花は顔見合わせる。

辰夫　あの、それじゃ、私たちはこれで失礼しますから……。
松子　あら、まだいいじゃないの。
お花　お店がいそがしいものですから、また来ます。
松子　そう。
お花　奥様は大変ですわね。
松子　まるで皆の家政婦ですよ。こんなはずじゃなかったのに。
お花　でも……みなさん本当にお元気ですわねえ。
松子　まア、おかげさまでね……でも、いずれそのうちにお迎えがくるでしょうけどね。
お花　……では、いずれまた……。

と会釈をして去ろうとしたとき、自転車を押しながら、区役所の係員二上が現われる。

二上　やあ、お婆ちゃんたち、今日は良い子にしているねえ。めずらしく仲がいいじゃないか。

タキ　いつだって仲はいいですよ。

二上　ははは、もっとも喧嘩ぐらいしてないと退屈だろうからねえ、ははは。お爺ちゃん、神経痛はどうだい。

重助　まアまアですね。

二上　六十五才以上のお年寄は、只でお医者さんに診てもらえるんだから、遠慮しないで診てもらったほうがいいよ。ええと、富田駒代さん……というのは（と駒代を見ると、彼女はウツラウツラ居眠りをしている）……そうか、このお婆ちゃんは、あれだったんだな。じゃお爺ちゃんが預っといて下さい。都バスの無料パスなんだ。（と出す）七十才になったから、都から交付されたんです。お爺ちゃんたちはもう貰っているね。

重助　貰ったけど、足が不自由だから、使ったことはないよ。

松子　せめて五年ぐらい前でしたら、重宝したでしょうけどね。

二上　ははは、それから、これは動物園の無料入場券です。お一人二枚ずつだから、合計八枚ね。はい、（と渡して）じゃ、また来ますからね。（と行きかけて）そうそう、それから、万一、具合でも悪くなった場合には、ここのボタンと、それから奥の座敷にもあったね、そのボタンを押して下さい。そしたら下の交番に通じてすぐにお迎えがあります。そうそう、この前みたいに悪戯に押しちゃ駄目ですよ。じゃ、お元気で。

と去る。

また聞え始めた工事音。

辰夫　おい、行こうか？（と言いかけて、フト、お花を見る。お花がうつむいて涙ぐんでいる）……どうした。

お花　……帰れなくなっちゃった。

辰夫　……また来ればいいじゃないか。な、そうしようよ。

お花　（頷くと、涙をふいて）……あの、私たち……家がすぐそばですから、これからちょいちょい来ますからね。困ることがあったら、なんでも遠慮なくおっしゃって下さい。……では、……あの……また来ますから……。

お花たち親子三人は去る。

やや遠くから選挙カーのマイクの声が聞えてくる。

声

ええ、次に私は、日本の老人問題、とくに六十五才以上のお年寄の問題につきまして、これまでにも力をそそいで参りましたが、申すまでもなく、お年寄の老後は、ゆたかな、美しく、満ち足りた、バラ色に包まれた人生でなければなりません。それこそが、わが党が一貫して主張して参りました……（と遠ざかる）

屋敷の中は、ふたたび静かになる。

松子は植込の前にしゃがんで草むしり、タキは無言で摺餌を作り、駒代は居眠り、そして重助は入場券を丹念に数えている。

工事の騒音が昂まる中で――――――。

――――幕――――

※　小幡欣治戯曲集１　大学書房刊

一九七五年（昭和五十年）十一月十三日　第一刷　より